

だ何等の決定的な結論に達してゐない。その手紙といふのは、どんなことが書いてあつたのかね。」
トレンドールはちよつと考へ込んでゐたが、やがて口を開いた。「僕の結論は一つしかない。それはエニッド・オイルバアが犯人だといふことだ。罪を犯してまでも隠さうとしたその秘密を、遠からず嗅ぎ出して見せるつもりだ。恐らくその秘密といふのは、我々にとつても實に意外な性質のものであるやうな氣がするよ。」

ウォルター・フェザーストンは、彫刻か何かのやうに、靜かに立ちつくした。
エニッドの手でベレーヤーズが殺されたなんてことが、どうしてあり得やう！

二五

英蘭では、濕つぽい霧の深い季節、一月初旬の或る日のことであつた。

ウォルター・フェザーストンは、モンテ・カルロのカフェ・ド・パリの露臺で吞氣さうに午後陽差をあびながら一杯の「アマガラン」をすつて、ルーマニア人の管絃樂隊に聞き入つてゐた。

フェザーストンの周圍には、愉快げな世界各國人種が卓を取りかこんでゐた。「天青色の海岸」で、存分に自らを楽しまうといふ、戦後景氣のよい資本家や、成金どもが群がり合つてゐた。こんな連中の中でも、フェザーストンは相當に顔知られた人物の一人であつた。一九一四年の前に續けて季節をこゝで過したので、賭博場でも常連として、玄人と同じやうに白骨牌をやることさへ出來た。

行き會ふ人の殆ど半分位は、會釋する程の顔見知りであつた。こゝでは、友情といふものが「賭博場の」緑色の絨毯の上で、容易に結ばれては、また容易に破られてゆくのであつた。

フェザーストンは、根城をこのモンテ・カルロよりも、もつと空氣の新鮮なニースに選んで、世界的に有名な遊歩場の側のロイヤル・ホテルに泊り、毎日のやうに、急行列車で「モンテ」にやつて來るのであつた。

あの秋の一日、新警視廳の大きな一室で、ハーバート・トレンドールとの會見があつて以來、フェザーストンはいろ／＼なことに遭遇してゐた。その結果は、ます／＼困惑の中に陥し入れられ、恐怖の念にとらへられるばかりであつた。少くとも、ヒュウ卿の罪狀があばかれるに違ひないといふことだけでも、フェザーストンは堪へ難いことであつた。

フェザーストンのその後の活動は恐らく比類のない程のものであつた。絶え間ない旅行中の心の緊張と、引き續いての興奮とは、大抵の人間を損ふものであるが、彼の鐵のやうな身體はよくそれに堪へた。そして何週間、續けて汽車や汽船の中で過しても、ちつとも弱らなかつた。どんな時でも、ちよつとの暇を盗んで眠ることが出來れば、どんな場所でも書物が出來るといふ藝當を心得てゐた。

所で、エニッドはフェザーストンが、どんなことがあつてもフランスは通らぬやうにと戒しめた時その理由を知つてか知らないでか、とにかく、まだ何か言譯を言はうとした。けれども、カルドウェル夫人が出立して一週間を過ると、エニッドは唯一人でハーウィッチとアントワープとの間の街道を取

つて旅行したので、それはピムリコの要心深い例の醫師を非常に狼狽させた。

ウォルターが、エニッドにはつきりした理由は何にも言はずに、唯フランスには入らぬやうに念をおして置いたのは、エニッド自身にその理由を推察させようとしたからであつた。パリで種々な秘密の根源を知つて以来、ポオル・ル・ポントワがどんなに公判を待つてゐるかといふことが、フェザーストンにははつきり解つたのであつた。輿論を沸騰させないために、事件はフランス當局の手で内秘に附されてゐた。そして訊問は必ず、閉め切つた室でなければ行はれないことに定められてゐた。

ポントワが捕縛されてから一週間後になつて、フランスの警察はポントワの別荘にあてた暗號電報を手に入れた。それはポントワの犯罪の證據物件となるやうな種類のものであつたが、しかし、非常に拙劣な、見え透いた通信で、ポントワの罪状をいよゝく確實なものにしようといふ目的で發送されたものであることは疑ひもなかつた。ポントワは發送人の無智なこと、無意味なことを極力申し立てたが、檢事は一向それに取り合はうとはしなかつた。勿論、その通信は、一應は巧妙に書かれてあつて、保安總本部に於ては、ポントワが明らかに贋造證券の束を受け取つたこと確められた。

この中傷的な電報は疑ひもなくワイルマルシュの策動に依つて、パリの警察を動かすために、悪醫師の友人の一人が發送したものに違ひなかつた。

一方、醫師は海外にある友人達から、盛んに通信を受けてゐた。けれども、ヒュウ卿と喧嘩をしてからは、絶えてヒル街を訪れようとはしなかつたので、老將軍との友誼は完全に失はれてゐた。

ヒュウ卿は、難事件が簡単に片附いたことをひそかに喜んでゐたが、しかしフェザーストンはワイルマルシュの性格を思つて、老將軍のためひそかに恐れてゐるんであつた。

ドクトル・ワイルマルシュは、確かに恐るべき敵の一人であつた。

ベレーヤーズの死の謎は、一層深まりゆくばかりで、一向に解決される模様はなかつた。訊問を行へば行つただけ、却つて測り知れぬ疑問の中に落ち込んで行くやうな氣がした。幾週間も、フェザーストンは、この謎を解かうと必死の努力を惜まなかつたが、たゞ測り知れぬといふことのみが残されたのであつた。

エニッドと、カルドウェル夫人とは、その計畫を變更して、エヂプトに行くかはりに、シシリイへ行つた。そして先づバレルモと、サイラカーズを訪れて後、地中海の絶景といはれてゐるタオルミナの「サ・ドミニコ」に滞在してゐた。この時、ヒュウ卿夫妻は、突然ブランシュがロンドンに到着したので、ごたくして、その冬は海外には出かけず、ヒル街に残つて、ポオルの妻や子供を慰めてゐたのであつた。

フェザーストンは最近に於ても、ベテログラードからジェネブ、ローマ、フロレンス、マラーガなどを旅行して、一週間ほど前からモンテ・カルロに来てゐるのであつた。實をいへば、單に遊びのためばかりで、こゝに滞在してゐるのではなかつた。露臺の向端には、一ヶ月も前から彼が鋭い注視を怠らぬ、一組のおしゃれな男女が坐つてゐるのであつた。

スイス人らしいこの二人を、半ダースにも及ぶ大陸の都市から都市へ尾行して、この二人の本當の職業が何であるか、それを知らうと務めてゐたのだ。この男女がモンテ・カルロにやつて来たのは、健康のためでも、また享樂のためでもない。眼鏡をかけた白髪まじりの紳士と會ふためであつた。この紳士は、二人が滞在してゐるメトロポール・ホテルに、二度もひそかに訪れて来た。

最初この二人を見たのは、ある晩レジェント街のロイヤル・カフェで、アメリカ人の友達と意屈しのぎに「ドミノ」の勝負をやつてゐた時、その隣の卓子に二人が坐つてゐたので、フェザーストンは男の方の顔を、どうも何處かで見たことがあるやうに思つたのであつたが、その顔はイドスワースにある自分の大きな寫眞帳の中で見たのか、それとも直接に會つたことがあるのか、どうも判断がつかなくかつた。けれども、その時から、二人を見失ふまいとつとめて、フェザーストンは持前の抜け目なさを發揮し、油断なく、我慢強く、二人を監視した結果、この二人がイギリスにやつて来たのは、何か餘りよくない目的があるといふことをつきとめたのであつた。この間フェザーストンの能力は殆ど驚異に價するものがあつた。トレンドールが嘗て言つたやうに、フェザーストンは豚が松露の臭ひを嗅ぎ知るやうに、犯罪者の臭ひを嗅ぎ知つた。

二人は急に滞在してゐた聖ベンクラ街のミッドランド・ホテルを引きあげて海峡を越えたが、その同じ船は、また同時にウォルター・フェザーストンをばこんだ。フェザーストンは、二人の注意を惹かぬやうにしながら、直接の監視を怠らなかつた。

モンテ・カルロは、モナコの首都で、世界の各人種の寄り集まる所だから、殊に冬は、大きな犯罪に資金を貢いだり、またこれを指揮したりする人々や、詐欺師などの會合地と目されてゐた。

賭博場の息づまるやうな廣間では、刺客がその雇主に會見し、立派なホテルでは、所謂、「不潔な働き」をする人々に賄賂が手渡しされるのであつた。こゝは、まさにヨーロッパ人の犯罪の取引所である。男も女も、「偶然」に自分たちを雇ひ入れる人物に出喰はず、安全な場所なのである。

ヨーロッパ各國の犯罪隠謀者たちが用ひる暗號の中には、必らず「モンテ・カルロの會見」を意味する符號がある。そんなわけで、ウォルター・フェザーストンは、カフェの日當りのよい露臺で、程よい場所に陣どり、賭博場に通じる、赤い絨毯を敷きつめた階段を昇り降りする人々を眺めながら暇をつぶすのであつた。

フェザーストンが監視を怠らない例の二人は、先ほどから五フラン金貨で、廻轉盤の勝負をしてゐる。女の方は儲けを勘定し、橙花水で味をつけた紅茶をすゝりながら、夫と一緒に愉快さうに笑つてゐる。二人とも、フランネルのズボンを袴いてゐる。眼の鋭い男が、煙草をふかしながら油断なく自分たちを監視してゐるとは夢にも知らない。

一目で、フェザーストンは、生粹のコスモポリタンに見られた。何時もは、淡灰色のフェルト帽をちよつと斜めにかぶり、血氣な冒險家らしい様子に見られもし、いかにもお人の好い伊達者に見られもした。けれども、この男の風采が、必らずしもその性質をすべて物語つてゐるとはいへない。實は

眞面目な、頭の堅い、聰明な男で、名譽心に燃えた、熱心な愛國主義者である。——つまり、徹底的なイギリス人の一人なのであつた。その上に、勇敢な冒険家を氣取る、血氣なコスモポリタンの教養も受けてゐるのであつた。

ちやうど、二人は立ち上つて、棕櫚の竝木路を通り越し、娯樂場に入つて行つた。この時、フェザーストンは、「マザガラン」を飲み終つて、新しい巻煙草に火をつけ、「鳩打ち」を監視するために、娯樂場の前を行つたり來たりするのであつた。

冬の陽は、静まりかへつた波の彼方に、金色または黄橙色の光を残して沈まうとしてゐた。彼は、石の欄干に寄つて、射手の一人がヨーロッパを射落さうとする素晴らしい射撃を見守つてゐた。競争が終るまで待つてゐたフェザーストンは、やがて急行列車でニースへ晚餐をした、めに歸つた。が、九時になると、またモンテ・カルロにとつてかへし、停車場の昇降機を降りると、何時ものやうに、賭博場の前をあちこちして、澤山な友人の誰彼とおしやべりをしたり、一緒に飲んだりするのであつた。この時は、例のスイス人が見當らなかつた。けれども、恐らく、二人は夕方ニースへでも遊びに行つたのであらうと思つた。夜中の汽車が着いても、二人は歸つて來なかつた。——その汽車の着くのを見張つてゐたのであつたが、——そこで、「メトロポール」に引きかへして、そのホテルの帳場で、二人のことを訊ねてみた。

「グラニエ御夫妻は、今夕、七時十五分の地中海線急行列車でパリへ向けてお發ちなさいました。」

見知り越しの番頭がかう答へた。

「それで、行先の所番地は何と書き残して行つたかね？」

自分の監視を見事逃れてしまつた二人の對度に、フェザーストンは腹立たしくなつて訊ねると、「あちらの所番地は書き残してをられません。お二人は、六時に、すぐパリへ歸るやうにといふ、命令の電報を受け取られました。幸、列車には、二人乗寢臺が一つ空いてゐたのでございます。」

フェザーストンは口惜しさで一ぱいになりながら、空しく引きかへした。愚かにも、二人を見失つてしまつたのであつた。方法はたゞ一つ、早速ニースに歸り、荷物をまとめて翌朝八時の普通列車で、パリへ二人の後を追つて行くの他はない。

けれどもパリは廣かつた。まる二週間といふもの、外國人の集りさうな場所を、あつちへ行つたりこつちへ行つたりして、例の二人を探し歩いたが、全く無駄だつた。すつかり絶望しきつた彼は或る日の午後フォルクストンに行き、その夜はホールズ街にある薄暗い自分の部屋に歸つた。

そして翌日、ヒュウ將軍を訪ねてみた。すると老人は以前よりもすつと元氣になつてゐて、エルコム夫人は、エニッドがシシリイでこの季節を大變愉快に過してゐること、フェザーストンの忠告通り人の多いカイロに行くのをやめてよかつたと、カルドウェル夫人とともに喜んでゐるといふ手紙が來たなど、話してくれた。

老將軍は言つた。

「フェザーストン君、相變らず最近の犯罪の謎には、大變な興味を持つてをられるだらうのう？」
「勿論です。御存じのやうに、その問題ではずるぶん書きましたよ。」
「わしは大分澤山、君の御本や書かれたものを讀んだが、大抵の點では意見が一致しとる。」と、老將軍は言葉を強めて、「ところで、今日の新聞に奇怪なことが出てをつた。讀んだかね？ ヒッチンの附近で、若い女が射たれて不思議な死を遂げてをつたのださうぢや。」
「いや、まだ讀みませんでしたよ。」フェザーストンは老將軍の言葉は耳に入らぬらしい返事をして、何かもつと興味のあることを考へつゞけてゐるやうだつた。

二六

翌朝八時には、フェザーストンは、警視廳の、トレンドールの部屋につつ立つて、グラニエ夫妻の疑はしい行動を報告してゐた。

「では、二人は確かに我々の考へてゐた人だ間ね。」と部長は言つた。

「確かにさうだ。モンテ・カルロでは、二人は誰からかの指圖を受けて、パリに行つたのだ。そこでたうとう、僕は二人を見失つてしまつた。」

トレンドールは、友が二人をとり逃がした時の狼狽を察して、思はず微笑んだ。

「しかし、君はうまくあの二人に食ひついたものだね。初めに君が二人を怪しいと睨んだ時にや、實

をいふと、僕はむしろ反對してゐたんだ。君はたゞ偶然レント街で出會つたとばかりぢやないか。どんなことからあの二人を怪しいと睨むやうになつたのだね。」

「あの時、非常に重視すべき出来事があつたのだ——ワイルマルシュが他の男と一緒にやつて來たんだが、入つて來て、二人の傍を通りが、りにグラニエに會釋をしたんだ。これが僕を考へさせた。」

「けれど、君はあの醫師について、何にも根據的な事實を知つてゐないぢやないか。」

「何にも知らないさ。」フェザーストンはあつさり答へた。「だが、あんなに苦心をして、突然パリへ逃げられたなんて、どう考へても殘念で仕方がない。」

「心配することはないさ。もし二人が我々の睨んでゐる人物だとすれば、間違ひなく、遠からず、捕へてお目にかける。時に、これを見たまへ。今、届いたばかりなんだが、外國人がやつて來て家を借りれば、どんな所でも地方警察は直ちにこれを報告することになつてゐるのだ。」

フェザーストンは、警察用の、大きな青い紙片を取り上げて見た。エセックス地方モルドン警察署長からの機密通信であつた。讀んで見ると、次のやうな意味のことが書かれてあつた。

「小生は、モルドン自治區の警察署長ウイリアム・ワードンでありますが、今般警視總監殿に宛て、サウスミンスター駐在のエセックス警察隊なるエス・デーコン警部より次の如き申告ありたることを報告したいと存じます。」

——去る九月十三日、金曜日、明らかに外國人と見られたる一紳士が、通信員たるモル

トンの邸宅代理商のヘーヤとヂェームズの二人に案内されて、サウスミンスター附近のアシエルダムにある、「水松屋敷」として知られてゐる家を見に参り、養禽園を始めるため、向う三ヶ年の借用契約を取りきめました。一週間後に借家人は、ロンドンから一貨車の家具が到着すると、早速この家に住み込みました。二日後の夜更けに、外に三臺の貨車が到着致しました。これは曉方、厩の前の空地で荷をほどかれました。ベーリイと呼ばれるこの紳士は、二十日間といふもの唯一人で住んでゐましたが、その後ピエトロと呼ばれる外国人の下男がこれに加はりました。この男は確かにイタリイ人らしいのであります。三ヶ月以上といふもの、かくの如くして過ぎ去り、小生は、この家——自家所有地に建てられた大きな建物であります。——に注視を怠らぬのでありますが、養禽園を営む形跡が少しもありません。依つて、この件を報告致すことになつたのであります。——エセックス警察隊警部

サムエル・デーコン

「これは實に奇怪だ！」読み終つて、フェザーストンは叫んだ。

「さうだ、何かあるに違ひない。」トレンドールは答へた。

「これはどうしても探りを入れて見る必要がある。もしよかつたら、僕、サンマーズを連れて出かけて行き、ちよつと様子を見て来よう。」

「よろしい。サンマーズに電話をかけて、リバプール街の停車場で君に會ふやうにさせよう。」部長は汽車時間表の方をふりかへり、「一時四十五分の汽車がある。これがちやうどいゝぢやないか。」

「結構だ。サンマーズには、リバプール街で會へるやうに、ぜひ話してくれたまへ。我々は『ベーリイ氏』なる者が果して何者だか、すぐ見破つてお目にかけてよう。」

一時半を少しばかり過ぎた頃、この小説家は、既にリバプール街の停車場のプラットフォームを歩いてゐた。その傍には、以前に船の機關手であつた時の面影の残つてゐる男、青色サージの服を着た、顔の小さい、中年の男がついてゐた。

やがて、一等車に腰を下すと、フェザーストンは、連れの男にサウスミンスター警部から来た報告を話して聞かせた。すると、サンマーズは、「例のドクトルは確か近頃一二回この方へやつて来たことがあるのですぞ、わしはどうも、そのベーリイとかベレイとかいふ男を訪ねたのぢやないかと思ふんだが——」

「なあに、今にすつかりわかるさ。」フェザーストンは笑つてゐた。

サウスミンスターで汽車から降り立つた二人には、小さな駐在所がすぐに見つかった。地方警察の警部は、前もつて電話で知らせがあつたので、二人を待つてゐた。奥の室に入つて、二人が腰かける時、緒ら顔の警部は、大きな両手を膝の上にひろげながら、話し出した。

「所で、ベーリイは今、家にゐないのです。あの人はよく出かけて行きます。家はかなり大きなもの

ですよ。尤も、ロンドンから来た四貨車の荷物がちやうど一ぱいに入るくらゐなものです。」

「この地方でベリーイ氏には誰か友達があるか、君は知らないかね？」

「いや、どうもはつきりわかりません。よく出かけて行つて、海岸警備隊駐在所の近くの、バーンヘムある『ブリッヂウィクツ・アームズ』あたりで飲んで来るやうですが。」

この時、フェザーストンは連れの男と意味ありげな視線を交した。

「訪ねて来る人はいかね？」

「たまアにあります。——何しろ外出勝ちですからね。時々婦人が一人訪ねて来ることがあります。」

あの男の妹だといふことです。」

「その婦人といふのは、どんな様子の女かね。」

「え、年は三十五ぐらいで、いゝも立派な服装をして、暗緑色の自動車を自分で操縦してやつて来ます。何でも、戦時には女運転手だつたさうです。」

「その女の名は？」

「ベリーイ嬢です。勿論、これも外国人ですがね。」

「その他に訪問客はないのか。」フェザーストンは鼻眼鏡を磨きながら、性急な調子で訊ねた。

「ベリーイ氏が家を借りて間もなくのことでした。或日、私がサウスミンスター駐在所に午前の勤務をしてゐますと、一人の紳士と婦人がやつて来て、アシエルダムの『水松屋敷』に行くにはどれ位道

程があるかと尋ねるのでした。私は、二人に、ニュームーアの傍を通り、小川を渡つて行く道を教へてやりました。それから平服に着替へ、歩道に沿つてそつと二人の後を跟けて行きました。」

「どうして、そんなことをしたんだ。サンマーズが訊ねた。」

「この訪問客から、何か嗅ぎ出したいと思つたのです。モルドン警察署で、家を借りる外国人を一通告するやうにといふ指令を見たものですから、それで、私は——」

「油断のないところを見せたかつたのだらう、どうだね、デーコン君？」小説家は面白さうに笑つて巻煙草に火を點けた。

「全くさうです。」大きな緒ら顔の男は答へた。「それから、私は、近道をとつて先に『水松屋敷』に行きました。ちやうど、二人の訪問客が到着する十分ほど前です。家の北側にある垣根の中に隠れて見てみると、間もなく二人が車道を登つて来る姿が見え、すぐに、主人のベリーイが二人を迎へに駆け出しました。婦人の方はひどく神経的になつてゐるやうに思はれました。駐在所で私に話しかけた時に、婦人の方がイギリス人であつたことは明かでした。」

「二人はどんな様子だつたかね？」二人の風采を説明してくれたまへ。「サンマーズが言つた。」

「私の記憶するところでは、男の方は、五十がらみの年配で灰色の顔をして、眼は黒かつたやうです。アストラカン皮の襟のある重い外套を着、淡灰色をした山羊皮の手袋を持ち、金飾りのついた曲り柄のマラッカ杖をつけてゐました。婦人の方は、まだずるぶん若くて——さうです、二十歳を出て

あなと思はれました。——おまけに大層美しい婦人でした。衣裳屋仕立てのきつちりとした茶色の服を着、大きな金の縮金のついた、黒天鵝絨の帽子をかぶつてみました。灰色が、つた毛皮を頸のまはりに捲いて、それと同じ雌手套をして、暗緑色の皮の手提げを持つてみました。」

フェザーストンは、話し手をちつと見つめたまゝ、思はず立ちあがつた。この男の説明するところによれば、その二人の訪問客といふのは明らかに、ドクトル・ワイルマルシュとエニッド・オールバア嬢のことであつた。ドクトルはよくアストラカン皮で縁をとつた外套を着てゐたし、婦人の身につけてゐたといふ服も帽子も、エニッドが三月以前に身につけてゐたものと同じであつた。

フェザーストンは緒ら顔の警部に、なほも急いで二三の質問を試みたが、それは、エニッドが明らかにこの謎の家の訪問者の一人であつたことを確かめるに過ぎなかつた。

「二人の名前を知ることには出来なかつたかね？」

「若い婦人は、連れの紳士を、『先生』と呼んでゐました。それ以外、何にも知ることは出来ませんでした。」警部は答へた。「そんなわけで、これは自分の考へ違ひだつたかとさへ思ふやうになりました。結局この紳士は、病人を見舞ひに來た醫者だつたのかも知れません。」

「恐らく、さうだらう。」フェザーストンは機械的に答へて、「君は、ベリーイが今日は家にゐないと言つたね。我々はこれから行つて、家の周囲を一廻りして來よう。君も一緒に來てくれたまへ。」

「承知しました。しかし、私は、ベリーイが今晚は家に歸つて來るやうに聞いてをります。昨晚、サ

ウスミンスタアの鐵道宿でピエトロに會つたもんで、ちやうど警察音楽會の寄附を頼みたいと思つてゐたので、何時ごろ御主人が歸つて來られるかと訊ねてみますと、ピエトロは、且那樣は今晚お歸りになりますと申してゐました。」

「しめた！ そんなら、屋敷を一通り見廻らう。養禽をやつて生計を立てると言つて、この家にやつて來た謎の外國人にお目にかゝらうぢやないか。」

十分ほど後に、警部は私服に着替へ、三人は平坦な泥道をアシエルダムの方へ進んで行つた。

かうして三人が歩いてゐると、ちやうどノースエンドを通り越した頃、變なことが持ち上つた。

サンマーズが急に引きかへして來で、物も言はずに小説家の肘をついたのである。

フェザーストンは、指し示された方向を見て、思はず呆然として立ちどまつた。

それは實に不可解な、信じられない光景であつた。自分の眼を疑つて、また見なほしたが、依然としてあまりにも奇怪な光景であつた。

フェザーストンは棒立ちになつたまゝ、ちつと向うを見つめてゐた。

二七

三人の偵察隊が、道の曲り角まで來ると、スコッチ織の短い服に同じ帽子をかぶつた若い婦人が、前を歩いてゐるのであつた。ウォタア・フェザーストンが驚いたのも無理はない。特徴のある灰色を

した上衣、それにその軽快な足どり、しなやかな身のこなし。それはまぎれもなく、まだシシリーにあるとばかり信じてゐたエニッド・オールバアであつた。

フェザーストンはもう一度よくよく見なほして、確かにそれに間違ひのないことを知ると、それとさとられぬやうに、連れの二人と一緒に曲り角に身を潜めて、エニッドの視野から逃れた。

「さあ、何か深い秘密があるに違ひない。あの婦人に我々がこゝにあることを知られてはいけない。彼は三人に言つた。」

「あなたは、あの婦人が誰かおわかりになつたのですか。」これまで幾度も一緒に仕事をしたことのあるサンマーズが訊いた。

「わかつたよ。」フェザーストンは嚴つく答へた。

「あの女は、きつと何かの秘密な目的でこゝへ來てゐるのだ。暗くなるまで、『水松屋敷』に近寄つちやいけないよ。」

「その時分までには、ベリーも家に歸つてゐますよ。あなたは、ベリーが家に歸つて來る前に、屋敷を探つて御覽になる筈だつたぢやありませんか。」と、警部は言つた。

フェザーストンはしばらく黙つてゐた。もしベリーが家にゐないのであつたら、エニッドが訪ねて行く筈がないと思つた。そこで、エニッドが顔を見知らないサンマーズに彼女の行動を見張りするやうに命じ、自分は警部と一緒に、例の疑問の家の方へ進んで行くことにした。

後ほど會ふことも約して、サンマーズは、パイプに火をつけ、急いで道の曲り角を廻ると、灰色の服を着た娘の後をつけて行つた。

「前にこの邊であの婦人を見かけたことがあるかね。」フェザーストンは警部に訊いた。

「え、もし私に見あやまりがなかつたら、ベリーが家を借りて間もなく、『水松屋敷』へ行く道を尋ねたのが、あの婦人でした。その時は、先刻も申したやうに、『先生』とあの婦人に呼ばれる紳士が一緒でした。」

「確かに間違ひはないね？」

「確かに間違ひはないとは申し上げられませんね。その時の婦人は、今とは違つた茶色の服を着てゐましたし、帽子だつて面纱だつて違つてゐましたから。」

「二人は、その時一度訪ねて來たきりかね？」

「え、一度つきりです。」

「ところで、何故あの婦人は『水松屋敷』の方へ行くのだらう。不思議ぢやないか。君はピエトロも今朝ロンドンへ行つたといつたね。」

「さうです。九時五分の汽車で發ちました。家には鍵がかゝつてゐます。あの婦人はきつとそれを知らないに違ひありません。」

「さうだらう。家まで行つて、家に誰もゐないのを知つたら、失望して引き返して來るだらう。その

時あの婦人に我々の姿を見られぬやうにしなければいけないよ。」

「大丈夫です。」警部は元氣に笑ふと、側を離れて、道路を通り越し、曲り角の見える所へ行つた。

「おや／＼たうとう、あの婦人はアシエルダムへは行かないのですよ。歩道を左の方へ進んで、ステブルの方へ歩いて行きます。あの婦人は道を知つてゐるに違ひないのですから、道を間違へるやうなことはないのに！」

「ちや、こちらはまつ直ぐに『水松屋敷』へ進んで行つてい、ちやないか。あの婦人はきつとこの附近の知り合を訪ねて行くのだらうが、一たい何處へ行くのだらうね。」

「あなたの連れの方が、それを調べていらつしやるでせうよ。これから『水松屋敷』へ行つて、一廻りのぞいて來ようちやありませんか。」

そこで、エニッドが、高い裸木の生垣の下を走つてゐる歩道を、ずつと先まで進んで行つたのを見ますと、二人は歩き出した。高い道を下つて、小川を渡り、右にまがつてアシエルダムの村に入つた。そこからニュー・ホールとの間を半分ほど行つたところで、袋小路になつてゐる横道を少し登つた。そのつきあたりに、アン女王時代の、古風な赤煉瓦の大邸宅が、高いスコットランド樅の樹立の間に半分かくれて、二人の視野に入つて來た。横町をつきあたると、高い古びた煉瓦の塀がそびえ立つてゐて、その中に二エーカーばかりの樹木の多い土地を擁してゐた。錆びついた鐵の大門から、母家の敷地までは、不揃ひな砂利を敷きつめた廣い車道がつゞいてゐた。四角な大きい建物で、部屋が

多く、飾り氣のない窓と、粗末な窓とには蔭が匂ひからまつてゐた。

冬の午後のにぶい日射しのなかで、屋敷は言ひやうもなく、陰氣に荒れ果て、見えた。何年前には、田舎で相當の分限者の住居だつたにちがひない。けれども、二十世紀ともなつて、大戦後の今日では、十年近くも住む人のないこの家は、淋しくも荒廢しつくしてゐるのであつた。

芝生には雜草が茂り、馬車道の所々には緑の苔が生えてゐた。窓枠にも、タイル張りの高い屋根にも苔が蒸してゐるのであつた。家の前の芝生の真中には、大きな水松の古木が四本も立つてゐた。高い生垣がめぐらされてあつたが、刈り込まれずに放つてゐるので、隔間だらけになつてゐた。

カーテンは極くありふれたもの、戸に行く階段は、灰色になり、藥束が散らかつてゐた。一見してこの邸宅は荒れ果てた、神祕的な空氣に包まれてゐるやうに見えた。

二人の男は軋む鐵の門をおし開いて、勇敢にも戸口の方へ進んで行つた。

二人は扉を激しく叩いた。何の答へもない。呼聲もたゞ大廣間に反響するだけであつた。

「内には大分澤山の家具があるらしい。この反響する音から判断すると。」フェザーストンが言つた。「四臺の貨物自動車がやつて來たんですからね。尤も、最初の一臺は普通の貨物車でしたかね。」と、警部は言つた。

「それが何處からやつて來たのか、知ることが出來なかつたのかね。」

「私は、運轉手が、サウスミンスターの宿屋で下りて休んでゐた時に、訊ねたのです。すると、運轉

手はベックハムのトリニチ家具會社から來たのだと言つてゐました。しかし、よくよく訊ねてゐるうちに、諺をいつてゐたことがわかりました。ベックハムにはそんな會社なんかはないのです。」

「君は貨物車から降ろされた家具といふのを見たかね？」

「最初の奴が來た時には、私はちやうどこ、にゐましたが、後の三臺の着いた時は、非番でゐませんでした。」

二人は、また戸をたたいたが、やつぱり誰もやつて來ない。一匹の獵犬が出て來たが、吠えつきもせず、なれなくしく傍へ寄つた。そこで二人は、空つぽな厩や、使用もしてゐない小屋のやうなものを偵察して廻つた。三つの古い塀が、わづかに養禽園の印となるものであつた。この塀が、大きな敷石の空地の真中に、空つぽで、ぼつんと据ゑてあるのが目立つて見えた。

そこには家の中に入つて行く戸口が三つあつた。それを一々叩いて見たが、みな閉め切つて鍵がかけてあつた。そこで、ふと氣をつけて見ると、屑を積みあげた上に、紙片れが散らばつてゐる。手紙を引き裂いたのだといふことはすぐにわかつた。手紙はフランス語で書かれてゐて、「水松屋敷」の借主の所有する有價證券に關するものらしい。

引き裂かれてしまつた手紙は、ほんの一部分しか見つかからないので、そこに書かれてあることの意味ははつきり汲みとれない上に、宛名も差出人の名前も一向にわからない。けれども、この古びた屋敷の不思議な借主、——養禽家を裝うてゐる——に、ワイルマルシュとエ

ニッド・オールバアと二人の訪問客のあつたことは、確かめられた事實なのである。

緒ら顔の警部が門の所を見張つてゐる半時間位といふもの、ウォルター・フェザーストンは屑山をほじくり返してゐた。この屑山は最近に焼かれたものらしく、紙屑は皆その縁が焦げ縮んでゐた。

生焼けの手紙を澤山掘り出して讀んで見たが、一向これといふ手掛りも得られなかつた。いよ／＼無用な探索を切りあげようとした時に、馴染み深い、青い用紙の屑がふと眼にとまつた。それは半分焦げ、雨に汚れてはゐたが、隅つこの方に、暗青色に浮彫がしてあつた。それこそフェザーストンには親しみのある、ヒル街の住所宛名の一部分であつた。

用紙は、エニッド・オールバア嬢が使ひ慣れてゐるもので、その上には、二ヶ月前の日附けと「上に」といふ言葉が一つ、見覚えのある筆蹟で書かれてあつた。仕込杖になつてゐる嚴乗なステッキを取り上げて、屑山を激しくひつかき廻し、その用紙の切端しをもつと探し出さうとしたが、もう一つも見當らなかつた。パラフィンが屑の上にふりかけられて、一そう燃え易くなつた焰の中から、やうやく焼け残つたこの小さな紙片こそ、明かに、エニッドがこの「水松屋敷」の不可解な主人に手紙を書き送つたことを證明するものであつた。

「うむ。」と、小説家は遂に唸つた。そして警部のところへ近づいて來て、「誰も邪魔者の來る恐れはないかね。」

「どうなさるのです？」

「ちよつと内部を覗いてみたいのだ。我々の想像してゐる以上に、内部にはいろいろの秘密があるらしい。間違ひなした！」

「主人と下男とは、自動車で歸つて来るか、さもなきや同じ汽車で歸つて来るだらうと思ひます。もし汽車で歸つて来るとすると、八時過ぎまでは、こゝへ戻る心配はありません。少くとも、三時間ぐらゐは我々の勝手にする時間があると思ひます。」

ウォルター・フェザーストンはあたりを見廻した。黄昏の色は早くもあたりを罩め初めてゐる。

「内は暗いだらうが、僕は懐中電燈を持つてゐる。臺所の窓は普通の鑿になつてゐるね。」

「なに、そんなものは、わけありませんよ。こゝに鐵棒があります。この前に私が試してみたんですが、横側にある階段のところの、小さい窓が一番入り易いですよ。」警部は小説家をつれて家の横手に廻り、地面から五呎ばかりのところにある。細長い窓を指した。

フェザーストンの心の一部を占めてゐるのは、エニッドのことである。何故、彼女はこの不思議な外國人に手紙を書いたのだらう。何故こんな家を訪ねるのだらう。何故こつそりイギリスに歸つて来て、この近くに出没してゐるんだらう。

二人がどの窓を第一に破らうかと考へてゐるうちに、短い冬の日はずつかり暮れ落ちてしまひさうになつた。暗い樹々の枝の間を、風は物侘しい聲をあげて吹きわたり、雲足は雨の前兆を見せるやうに早かつた。

「いや、どうも！ 何といつたつて、これは愉快な住居ぢやないね。」フェザーストンが言つた。

「さうでもありませんよ。私がこゝに住んでゐたら、一週間の中に、ガーター勳章をもらひます。」と、警部は笑つた。「けれど、一體ベリーの毎日こゝで何をして暮らしてゐるんでせうね。」

「養禽さ。」フェザーストンは笑つて、爪尖で立ちあがり、懐中電燈の光で窓枠を調べて見た。

「これやいけない！ 新しい鐵の鐵戸がうしろに閉つてゐる。」

「だつて、カーテンに透いて見えないぢやありませんか。」

「ところが、こゝにはちやんとあるんだ。ひどく泥坊を恐れてござると見える。」

かうして窓から窓へと、地階の窓を全部調べて見たが、皆同じやうに鐵の鐵戸が下されてあつた。

それは粗末なモスリンのカーテンの後にかくれて見えないやうになつてゐるのであるが、この一事でも、この家の謎はますます深まつてゆくばかりだつた。

「これはをかしい、尤も、私はこれまで燈火で調べて見たことはなかつたのですが……」

「いや、これはみんな極く最近に嵌め込まれたものだ。どうも内側には、鋼鐵の割板が組格子のやうに嵌め込まれてあるやうに思ふよ。ベリーの先生お氣に入りの御趣向なんだらう。つまり、闖入者には、一步もその住居の内に近づかせまいといふのだらう。」

「そこで、どうしたらいいんでせうね？」

急にあたりが暗くなり出したので、デーコン警部が心配して言つた。

ふと、この時、フェザーストンの胸に一つの事が浮んで来た。それは、エニッドが、どうしたつて一度はこゝへ訪ねて来るに違ひないといふことであつた。

「上方の窓からなら、入ることが出来るに違ひないと思ふよ。」この家の秘密を探り出すことに夢中のウォータア・フェザーストンは答へた。

「洗濯場にはきつと梯子があるに違ひない。それを取つて来よう。」

朽ちかけた、ガタ／＼の梯子が見つかつたので、それを苦心して壁に立て掛けた。けれども、それは思惑通り、どうしても窓までは届かないので、フェザーストンは苔が生えてぬる／＼したタイル張りの屋根びさしの上に登つて、暫く探してゐるうち、裏梯子の上にあたるところに天窓のあるのを發見した。それをこぢ開け、もしもの場合にとポケットの中に用意して来た丈夫な絹の綱を煙突のまはりにしぼりつけ、天窓から下に投げ込んで、素早くそれを傳つて降りて行つた。

次の瞬間、闇の中から、聞きなれぬ低い男の聲が、

「誰だ、そこにあるのは？」と、誰何の聲を聞いたが答へる者もない、ちつと息を殺してゐると、

「何をしてゐるのだ？」と、明かに外國訛りのある聲。「言へ！ 言へ！ 言へ！ 言はないと、撃つぞ！」

二八

ウォルター・フェザーストンは身動きもせず、ちつとすくんでゐた。思ひがけない故障の起つた

ことを悟つた。外面の壁に立てかけたまま、にしてある様子が、自分の闖入を明白に物語つてゐるのであらう。けれども、内部に入り込んでしまつた以上は、萬難を排してこの屋敷内を探り、謎の外國人が養禽園を始めた理由を確かめようと決心した。で、發見されるのを恐れて、懐中電燈もつけずに、眞つ暗闇の中にひそんでゐるのであつた。

ペーリイとイタリー人の下男が、不意に歸つて来たのか。それはあり得べきことである。

息を殺してゐる瞬間は、實に長く感じられるのであつた。

すると、また突然に、二度目の誰何の聲を聞いた。その言葉の中には、イタリー語の激しい嘲罵が混つてゐたので、聲の主がピエトロであることが知れた。

忽ち、その誰何に答へて、ズドンと一發、銃聲が響いた。——確かに、それは警部のピストルが射

つて放たれたのである。續いて、二發三發。この早業は、デーコン警部がなか／＼敏捷な人間であることを證した。その結果は、思つた通り、イタリー人の下男は踵を返して命から／＼車道の方へ逃げのびて行つて、イタリー語で助けを呼んだり、警官を呼ぶぞと脅したりするのであつた。

「マドンナ・サンター！ お助け下さい。お前は誰だ？ 警察に訴へてやるぞ！」

叫び／＼下男は道路の方へなほも逃げて行つた。下男が姿を隠すと、警部は、大丈夫ですよ、うまく脅かして逃がしてやりました。早く家の中を探つて御覽なさいまし。あいつが騒ぎを起さぬ先に、きつと調べがつくでせう。」

フェザーストンはさつそく懐中電燈を照して臺所を通り、廣間の中に入つて行つた。部屋から部屋へ駆けぬけて、階下には二つの部屋しかないことを確かめた。一つは、もと食堂だつたのを、居間とするため家具が置かれ、書齋には、ピエトロが眠るのらしい、寢椅子が置いてある。卓子の上には、すつかり彈丸をこめた、重い連發拳銃があつたので、フェザーストンは直早くこれを自分のジャケットのかくしの中におさめた。

やがて身をひるがへすと、古い階段を一度に二段づつ、飛ぶやうにして、二階へと駆け上り、またも部屋から部屋へと探索を續けた。主人の寢室にだけしか家具は入れてなかつた。その部屋には、數知れぬ衣服があり、化粧卓子の上には、縫製用の附け髭が置かれてある。また、小さな書物机が窓の下にあつて、その上には澤山の紙片が散らばつてゐる。

なほも懐中電燈の光で、あたりを見廻してゐるうちに、驚いた。部屋の隅つこには更に一臺、綺麗な卓子があつて、變な形をした、一見印刷機とも見えるやうな機械がすゑてある！ どうにも腑に落ちかねる變な機械だ。

その他にも、變な、わけのわからぬ器具や機械が一杯ある。これこそ、トリニチの家具會社からの貨車といふのが、こゝへ運び込んだ品物に違ひない。

すると、その時、デーコン警部がまた呼んでゐる聲を聞きつけた。で、フェザーストンは石の階段を下り、緑も色褪せた羅紗張りの扉をぬけ、表玄関に出て來た。見ると、デーコン警部と、ピエトロ

とが、顔と顔をつき合はして、何か騒々しく嘯鳴りたてゝゐる。

イタリー人は、アシエルダムの村人を引具して歸つて來たらしかつた。砂利の車道に、それらしい澤山の人々の聲が聞えた。

「わしは半時間ほど前に歸つて來たんです。そしたら、誰か知らんが、わしに向つてピストルをぶつ放した。わしを殺さうとした！」イタリー人の下男は興奮して、不確かな英語でしゃべつてゐた。

「だが、一體それは誰だつたんだね？」デーコン警部は何喰はぬ顔をして訊ねてみた。デーコンは、事實、どうしていゝかわからなかつた。フェザーストンはまだ家の内にあるし、たゞ一つの逃げ道である梯子は、まだ家の側面の壁に立て掛けたまゝになつてゐる。

「泥坊なんだ！」興奮すればする程激しい外國訛りをむき出しにして、イタリー人は叫んだ。「わしが誰だと怒鳴つたら、奴等はわしを撃つたんだ。幸、警部さんが來てくれて、實に嬉しい。」

「私も御同様だ。」と叫んで、その時、表戸をさつさと開いた者がある。ウォルター・フェザーストンである。彼は、びつくりしてゐる村人たちの前に立ちはだかつた。けれども、あたりが眞つ暗だつたので、聲には驚いたが、村人は、飛び出して來た男が誰だか見わけがつかない。續いて、

「デーコン君、その外國人を捕縛しろ。」と、フェザーストンは威嚴のある調子で命令した。

「お前さんは誰だ！」イタリー人は怒つた。

「お前には覺えがある筈だ。」フェザーストンはイタリー人にさう言つてから、村人達の方を向いて、

皆さん。私はデーコン警部と一緒にこの家を探査にやつて来た者です。本當か諷かは、デーコン君が説明するでせう。」

「間違ひありません。發砲したのは實はこの私です。こいつを驚かしてやつたのです。」

元氣な警部は既にイタリー人の襟首と袖口とを、しつかりつかまへて、かう説明した。

これを聞いて、村人達はみんな面白さうに笑つた。大戦後、村人達は誰でも外國人といふと毛嫌ひをしてゐたので、警部がイタリー人を捕縛するのを寧ろ喜んで見てゐるのであつた。けれど、一體何のために、警部たちが「水松屋敷」を探査したんだらう、と一同は不審に思つた。ペーリイといふのは、物靜かな、おとなしい人で、金惜しみをちつとも思はないと思はれてゐたのである。

「デック・ベヤード」デーコンは村人達の中の一人を呼び出した。「モルドン警察署長のワードンに電話をかけて、すぐに三人ほど人を寄來して貰ひたいと言つてくれ。」

「承知しました。」男はすぐに返事をして出かけて行つた。その間に警部はぶつ／＼言つてゐるイタリー人を、護送巡査の來るまで家の中へつれこんだ。

デーコンが、二人の男を招き入れて、三人してピエトロは見張つてゐる中に、フェザーストンは、イタリー人の騒ぎに驚ききつてゐる村人の群に向つて話しかけた。

「皆さん。もう二時間ほどのうちに、この家の主人のペーリイが歸つて來ると思ひます。この男には重大な嫌疑がかゝつてゐるので、ペーリイがこゝから歸り着くまでは、各自の名譽にかけて、

只今起つたことについて一言も洩らして頂きたいのです。皆さん一人残らず、こゝに留つて、待つてゐて頂きたいのです。もし一言でもサウスマインスターの方に聞えらると、ペーリイは踵をかへし、法網をくゞりぬけて逃げ去つてしまふことになるでせう。」

「どんな嫌疑なんですか？」と、髯を生やした年寄の労働者が尋ねた。

「非常に重大な嫌疑なのです。」

そこで、しばらく沈黙が流れたが、やがて一同はこゝで待つてゐて、この重大犯人の劇的な捕縛に立會はうといふことに同意した。どんなことになるか、それはまさに一ツの投機的な場面であつた。けれども、これまでの犯罪は皆やはりこんな風にして發かれたのであつた。

その間にフェザーストンは、みすぼらしい居間に引き返して來て、イタリー人ピエトロを訊問したが、不機嫌にろく／＼答へようとはしなかつた。彈丸をこめた連發拳銃を持つてゐることをデーコンが発見して、直ちに沒收した。

「俺は屋敷の中をすつかり搜索したんだ。何かあるか知つてゐるぞ。」フェザーストンはピエトロに向つて言つた。

けれども、下男を裝うてこそゐるが、實は、「主人」といはれる男と一緒にこの家の借主であるピエトロは、返答としてはたゞ齒をむきだし、イタリー語で呪ひの言葉をつぶやくばかりであつた。

フェザーストンは更に、まだ探索してゐない他の寢室を調べにかゝつた。錠を毀して内部へ入つて

見ると、そこにも變な形をした印刷機と一緒に、妙な紙片が一杯にあるのを發見した。

一體それは何であらうと、一生懸命に調べてあるうちに、突然、またピストルの音がしたかと思ふと、外で人々がガヤ／＼騒ぎ出したので、何事が起つたかと戸口まで駆けつけた。すると、

「どこにいらつしやいます？」と、一人の男が表階段を登りながら怒鳴つてゐる。「お二人とも、どこにいらつしやいます？ この人達はこゝへやつて來ようとして、私達を見ると急に、逃げ出さうとしたんですぜ！」

フェザーストンに安全燈をとりあげて、それに燈を點け、そのにぶい明りで、人々の間に捕へられてゐる二人の姿を照し出した。

驚いたことには、サンマーズの前に、色蒼ざめて、恐れ戦いてゐるエニッド・オールバ嬢と、灰色の凄い顔をしたドクトル・ワイルマルシュが立つてゐた！

二九

エニッドはウォルター・フェザーストンの姿を見ると、驚き恥らつて、思はず尻ごみをした。ワイルマルシュとても自分の一番強敵と思つてゐた男との意外な會見に、少なからず驚いた。

先程からのことに非常な興味を持つて立會つてゐた村の人々は、事の真相は知らないが、とにかく、あまりにも慌てふためいて逃げようとした様子が怪しいと思つて、この二人を取り押へたのであつた。

「エニッド！」彼女がうつむいて不承不精に戸口を入らうとした時、フェザーストンは鋭く呼びかけた。「これは一體何といふことですか？ こんな時刻に、何故あなたはこの家へ訪ねて來たのです？」

「あゝ、ウォルター、我慢して聞いて下さい！ あたし、すっかりお話ししますわ、すっかり！」かう叫んで、エニッドは手袋を嵌めた小さな手を型く握りしめた。それは激しい感情の爆發を思はせた。

「話してはいけない！」ドクトルは鋭い聲で唸つた。「もし話したら、あなたのために、もつとひどいことになるぞ！ 黙つておればいゝのだ。でないと、思ひ知ることがありますぞ！ わしが本當のことを話してやる。あなたはそんな眞似をしてはいけない。」

エニッドは、竝々ならぬ權力を持つてゐる男に脅されて、尻ごみした。彼女は必死になつて、フェザーストンの手にすがりついてゐたが、ワイルマルシュの脅迫にあふと、その手をほどいて、廣間の中に、蒼ざめて目を見ひらいたまゝ、硬くなつて立つた。

「サンマーズ君、君はこの男を知つてゐるだらう？」フェザーストンが言つた。

「知つてますよ。知り過ぎる程知つてるとも言ひませうかね。」サンマーズはにや／＼して答へた。

「よし、すぐさまこの男を取り押へたまへ、そしてロンドンから指令の來るのを待つんだ。」

「君は何もわしを取り押へる權力を持つてゐない筈だ。君は警官ぢやないではないか。」ドクトルは拒んで言つた。

「いや、この男は警官なんだ。」フェザーストンはサンマーズを指して、警官、この男を拘留してくれたまへ。」

警部は進んで、その大きな手で醫師の肩をひつつかみ、引き立てようとした。

「これは不法だ——實に亂暴だ！ わしは何も罪に問はれる覚えはない。」

ドクトルはしきりに身をふりほどかうとした。

「そんなことを言つても、もう遅すぎるよ。」犯罪の謎を解くために、長い時間と莫大の金とを費した男は、静かにかう答へた。

二階の空間になつてゐる寢室の一つで、フェザーストンは、精巧な小印刷機を試べてゐる中に、その傍に澤山の一磅紙幣を發見したのであつた。不思議に思つて、その一枚をとりあげて見ると、それがまだ出來上つてゐないことに氣がついた。それは綠色にだけ刷られてあつて、まだ茶色の色揚げがしてなかつた。けれども黒の番號づけまであつて、紙から印刷から、全く完全なものであつた。次の瞬間には、事の真相が、はつきりとフェザーストンの頭に閃いた。こゝにすゑられた器具から印刷機から總てのものは、大英國の戰時紙幣の束物を印刷するための物であつた。次にすゑられた器具から次に入つて行つた部屋でも、同じやうな紙片の束を澤山に發見した。皆、綺麗にゴム紐で束ねられ、色揚げと最後の仕上げを待つばかりになつてゐた。ある束は、議會の建物だけが刷り込まれて、他の面は空白になつてゐた。

懐中電燈の光に照らし出された無數の贋造紙幣の發行高が、百から千の單位にまで及んでゐるのを見て、フェザーストンはそれがみな國民の大なる損失となることを思つた。

また續いて、フェザーストンは、未完成の紙幣の一枚をとりあげて見て、それが完全といはれるまで精巧に出來てゐるのを認めた。この部屋にある種々な道具を使つて、紙を漉すところから、完全な一磅紙幣に出來上るまで、實に驚くべき技術によつてなすとげられるので、専門家もその偽造を見破ることが出來なかつたのであつた。同様の仕掛けで出來たフランスの百フラン紙幣も澤山あつた。

これらの情景は實に驚くに絶えたるもので、イギリス國家の大きな傷手となるのであつた。しかも一團の首魁となつてゐるのは、あの不可解な醫學博士で、ピムリコを本城として、その實際活動を行つてゐたのだつた。このみすばらしい家の中にこんな驚くべき印刷機がすゑられてあつたといふことは、實に恐るべき事實であつた。かゝ誰、安物のバラフィン洋燈を探し出して來て、それに灯を入れた。その周圍に皆が集つて、表戸は固く閉された。

ピエトロと、この醫師と、連れの若い婦人とが、みな知合ひであることは明らかであるのに、二人の男はまだ、互ひに取り押へられたことについて、ひどく腹を立て、あるのであつた。

フェザーストンは、醫師の前に立つて、重々しく口を切つた。「ワイルマルシュさん。私は既にこの家の中を捜査して、何があるかすつかり調べあげたのですよ。」

「あんたが、この男に喋つたんだらう！ エニッドさん、あんたは我々を裏切つたのだ！ だがあん

たはもつとひどい目に會ふぞ。——あなたの家族だつて同様だ。思ひ知るがよい！ わしはあなたの
お義父さんのことをすつかり曝らしてやる。あなたの一家族は一世に汚名をさらすのだぞ。——醫師は
エニッドを罵つた。エニッドは、一言もこれに答へようとはせず、死人のやうに蒼ざめ、うなだれて、
唇は大理石のやうに白かつた。エニッドは、ワイルマルシュが捕はれたからには、決して彼女のこ
とを逃して置かないことを知つてゐた。

「しばらくの沈黙が——痛ましい沈黙が、部屋を領した。

續いて、戸外にあたつて物音が聞えた。それがだん／＼近くなつて、やがて自動車と知れた。
自動車は戸口の前でとまつた。古風なベルが、殆ど空つぼのやうな家の中に、大きな音をたて、鳴

りひびいた。

表階段の上に、厚い外套を着た四人の男が立つた。警視廳の二人の探偵と一緒にトレンドール部長
が、ヒュウ・エルコム將軍を伴つて來たのであつた。

「やあ！ フェザーストン君！」トレンドールは息を切つて叫んだ。

「僕は、ワイルマルシュがきつとこゝにゐると睨んだんだ。どんな事があつたかね？」

「うん、ドクトルはちやんとこゝにゐるよ。この家の中で、一寸不思議なものを発見したんだ！
造紙幣の祕密印刷機だ。」

「あ、それはもうちやんとわかつてゐたんだ。我々には初對面の、このヒュウ・エルコム卿が、よ

く知つてをられる。今日、僕の所まで出頭されて、その経過をすつかり話して下さつたのだ。今日の
午後、卿が話されたことは、これまで我々が知り得たことの中で、最も貴重な事實だつたよ。」

「わしは、この悪黨どもについて知つてゐることがあつた。といふのは——つまり、トレンドール君
に打ち明けた通り、ずつと以前にこの計畫に加はることを迫られて、助力をしたのぢや。」

「閣下、あなたが何をなさつたにしろ、遂に總てをお明しなすつたのですから、助力をするふりをし
て、今日私に知らせて下さつた事實を突きとめられたことになるのです。——鋭い顔をした、警視廳の
一探偵が言つた。

フェザーストンは、常々非常に尊敬してゐたこの立派な老將軍が、過去の行動に對する償ひをしよ
うと努力してゐるのを見て、大層喜んだ。しかし、今そんなことをかれこれ言つてゐる場合でないこ
とを知つてゐるので、彼は四人を殺風景な食堂に案内した醫師とヒュウ卿が向きあつた時には、しば
らく、重つ苦しい沈黙が續けられた。

ワイルマルシュはトレンドールの顔を見知つてゐたので、もうすつかり犯罪が明白になつたことを
知り、ヒュウ卿が、自分を裏切つて、總てを告白したことを悟つたのである。

「このいま／＼しい悪黨め！ あんなに澤山の金をやつたのに、わしを裏切つたな！ しかし、貴様
とわしとは、何處までも一緒に行くんだぞ！」ビムリコの博士は遂に本性を顯して猛り立てた。

「何とでも好きなやうにいふがい、ぢや。」と、老將軍はあざけり笑つた。「お前が何と言はうと、わ

しにとつては同じことぢや。わしはもうちゃん自分の邪道に踏み込んだことを認めてゐる。お前の手から金を受取つたことを否定しようとしてもしないし、また明かに重大な罪を犯したことをも認めてゐる。——わしが一步を踏み出したばかりに、お前はわしをます／＼深味へ陥し入れようと、何時もこの事を暴露してわしを破滅させてやると脅迫したではないか。しかし、幸にも、たうとう死ぬやうな思ひをして、そこにゐるエニッドに、この事を打ち明けたため、エニッドは、わしが法の裁きを受けねばならぬことを説き、また、既に犯した罪の償ひとして、この後はお前達の秘密を探り、時節が来たら、これをすつかり、その筋に通告せよと勧めてくれた。さうして、エニッドは、お前や、お前の仲間と知合ひ、自分の名譽も自分の幸福も、未來も賭けて、たゞ一意わしのために、お前たちの卑劣な企てを探つてくれたのぢや。」

「ポオル・ル・ポントワに贋造紙幣を供して、フランスに通用させたのは貴様だつたぢやないか。フランスの官憲はそれを知つてゐるんだ。もし貴様でも、貴様の繼娘でも、フランスへ一步踏み込んで見ろ、すぐに捕縛されるんだぞ。」

「ところが、意外、わしの女婚のポオル・ル・ポントワは昨日放免になつたのぢや。お前の裏切は、すつかり、フランスの保安總本部に知られてしまつたのぢや。」ヒュウ卿は勝ちほこつて笑つた。

「その上、この男なんですよ。」ウォルター・フェザーストンは、エニッドにビムリコの博士を指し示した。「——フランスの警察へ、あなたとお義父さんのことを密告したのは。だから、僕の忠告を

お聞きにならなかつたら、捕縛されるどころでした。あなた方と私との親交を察して、——そして、また、あなた方が真相を洩さうとしていらつしやることを知つて、あなた方を外國の牢獄に監禁し、一切、口を開かせまいとしたのです。」

「何時もあなたがあたしを疑つていらしたことは知つてゐました。」エニッドはウォルター・フェザーストンの傍に立つて、急いでその手を握りしめた。「でも、あなたは、今あたしを許して下さいませわね。ね、許して下さいな？」さう言つて男の決然とした顔を見上げた。

「勿論ですとも。もうさつきからあなたを許してゐました。僕には、どうしてこの男と親しくなさるか、その本當の理由がわからなかつたものですから。」男は答へて、手袋をはめたエニッドの手を持ちあげると、靜かに自分の熱い唇に押しあてた。

「もつと種々な嫌疑があなたの方の上にかゝつてゐたとしても、總てを賭して、この卑劣な大陰謀を發いて下さつたことに對しては、あなたも、あなたのお義父さんも、國民の心からの感謝をお受けになるでせう。一方、この男は、あらん限りの報いを受けるのです。」と、ドクトルを指さした。

ドクトル・ワイルマルシュは威嚇するやうに前に進み出たかと思ふと、ポケットから自動連發銃を取り出し、心中をすつかり告白してしまつた老將軍を狙ひ撃たうとした。間髪を入れず、デーコン警部が躍り出て、その銃をねち取つた。彈丸は天井めがけて發射した。

醫師は腹立たしさと口惜しさに眞蒼になりながら、こんどは、この一軒家をすつかり搜索したフェ

ザーストンを口汚なく罵つた。けれども、フェザーストンはたゞ冷笑するばかりだったので、ますますいきり立ち、まるで檻に入れられた獅子のやうに荒れ狂つた。けれども、どんな反抗も今は無駄なことを知つて、ワイルマルシユは、やがてまた靜かになり、自分の現在の立場を、純粹な哲學的見地から批判してみたりするのであつた。十分も過ぎた頃、また自動車が一臺到着した。デーコン警部の應援を求める電話によつて、モルドンから駆けつけた四人の私服巡査と、監督官とが下り立つた。この一行が入つて來ると、ピエトロはふるへた。しかし、細い眼をしたビムリコの醫師は、依然として不機嫌に黙りこくつて、唇を噛みしめた。彼は今、自分の掌中に粘土の如く握りしめたと思つてゐたその男に、すつかり陥し入れられたことを悟つたのであつた。

場面は頗る高潮して來た。みすばらしい食堂が興奮した人達の話聲で滿ち溢れるやうになつた。この時、氣づかれぬやうに、フェザーストンはエニッドを物蔭につれて行つて、短い、しかし、非常に愛情の籠つた、熱情的な言葉をさゝやいた。

「あゝ、ウォルター、あなたのお言葉で、あたしの悲しみの重荷も不安もすつかり心から取りのぞかれましたわ。あたしは、本當のことがわかつた時にも、きつと許しては下さらないだらうと、随分心配してゐたんですもの。」エニッドは感激のあまりに泣き出した。

「だが、僕はもうあなたを許してゐるんです。」男はさゝやいて、女の手をきゆつと握りしめた。「では、待つてゐて下さいね。あたしたち二人きりになつたら、何もかも、すつかりお話ししますわ。」

あゝ、ウォルター、あなたは、あたしがどんなに苦勞をしたか、御存じないのね、あの恐い事件の中に捲き込まれてゐた間の、あたしの心配はどんなだつたでせう！

けれども、ちやうどこの時、扉が開いて、少し前に激しい呼鈴の音を聞いて行つたデーコンが一人の男を案内して入つて來た。

「皆さん、この方が、この家の借主ベリーイ氏であります。」警部は、嘲笑的な馬鹿丁寧さで、一同を紹介した。

フェザーストンが顔をあげて見ると、驚いたことに、戸口のところに立つてゐる男は、自分が一生懸命に跡をつけて、その行動を探つてゐた顔見知りの男、——悪事の指圖と、恐らくその報酬を受けるためにモンテ・カルロへ行つた男、——ムッシュウ・グラニエとして通つてゐた男、——その人なのであつた！

三〇

あの落着いた、物優しい「水松屋敷」の主人が、マルドンの警官に拘引されたといふことは、眠つてゐるやうな時代おくれの村落アシエルダムの人々をひどく驚ろかしてしまつた。

その屋敷を搜索するのに、デーコン警部はたつた二人の助手しか使はなかつた。トレンドールも、マルドンから來た探偵も共々、デーコン達に向つて、この搜索は秘密裡にやつて貰ひたいと熱心に頼

たのんだ。

そして、それに附け加へて、トレンドールは言った。

「皆さん、我々のこの發見を、私はあまり世間に知らしたくないんです。我々は餘計な驚駭を世間に起すことを避け、同時に、悪者に對するこの捜索隊のことも、なるたけ隠した方がい、と思ひます。だから、こゝにをられる方はどなたも、私どもの捜索局を助けると思つて、今夕こゝでどんな事が起つても、ちつと黙つてゐて下さるやうに。」

一同は肯いた。それから、その場を徹底的に捜索した結果、約百萬磅の偽造證券を押收した。先づ機械で皆一様に黒く印刷し、それから本物になぞらへて手で仕上げた。全くこの悪黨どもは巧妙なる偽造の技術をもつてゐたのである。

一應捜索が終ると、トレンドールは言った。

「ヒュウ卿、あなたの今日のお働きは十分推稱に値します。あなたは、我々がこの大きな組織を以てしても猶且つなし得なかつたことを成し遂げて下さつた。」

「閣下、しかも、あなたはその罪滅ぼしを完全になさいましたのです。」

興味に驅られて、自動車の前燈の周りに集つてゐた群集は、例の醫師がマルドンの警官二人に衛られて出て來たのを見ると、いよゝゝいきり立つて來た。犯人達はみな自動車に乗せられ、護送されて

行つた。第二番目の車には、「水松屋敷」の主人とイタリー人の下男とが乗せて行かれた。

フェザーストンや、トレンドールや、ヒュウ卿や、エニッドなどは、ベレーの運轉する車で運ばれ、デーコン警部と、二人の部下だけがその魔の家に残ることになつた。

午後の一時少しすぎ、ヒル街の美しい應接間、薄薔薇色の絨氈の上で、エニッドとたゞ二人で相對してゐるのは、フェザーストンである。その手はエニッドの肩におかれ、その燃えるやうな深い眼光は彼女の眼に食ひ入つてゐた。女の美しい瞳にも、また戀の光が輝いてゐた。

二人は最初會つた時から、お互ひに尊敬し合ひ、よい友達として固く交つて來たのだつた。

ウォルター・フェザーストンはたつた一度だけ、ビアリッツの海岸で、秘めた胸の思ひを語つたことがある。彼はエニッドを愛してゐた。それこそ全身的に愛してゐたのだ。だが、彼女に對する疑惑の黒雲はどうしても消え去らぬばかりか、日を追うてますます濃くさへなつて行つたのだ。そのため、あはれフェザーストンはどうしていゝかも解らなかつた。快活で、機智があつて、運動好きのこの英國少女は、美しい顔をして、のびゝと育つて來た。しかも災厄の戦争の後といふものは、ワイルマルシエと知己になつたばかりに、彼女の愛してゐた總てのものを犠牲にしなければならなかつたのである。それは何故であつたらうか。

「ねえ、エニッド。」フェザーストンは思ひ入れ深く言つた。彼の優しい手は依然として彼女の肩にかかつてゐた。「何故、あなたは僕に本當のことを言つてはくれなかつたのです。あなたは僕と同じ

く、愛國的な強い動機から、しかも、僕と同じ方向に働いて来たのぢやありませんか。彼女が蒼ざめて、ちつと黙つてゐた。

「ウォルター。あなたに話すのが恐ろしかったのです。お義父さまの裏切りのことを知つてゐるあなたに、どうして、あたし、本當をいふことが出来たでせう。あたし達を疑つてゐるあなたに、つまらぬ辯解をすることは、結局あなたの疑惑をますます深く深めるばかりだと思つたのです。でも、そのために、どんなにあたしが苦しんだか、あなたは御存じないでせう。あゝ、本當に、何といふ苦しみだつたでせうね。何故あなたがあたし達をフランスまでも尾行していらしたか、あたしはよく知つてをります。それは、あなたの疑惑を確めるためだつたのですわ。」

「さうです。僕は本當に、あなたがあの悪人に操られてゐるものとばかり思つてゐたのです。」フェザーストンは低い唖れ聲で、「最初僕は、あのワイルマルシユがあなたを卑怯にもフランス官憲に密告した後で、あなたに戒告しようかと思つてゐたのでした。しかし——」男は女の愛らしい瞳に熱心に見入りながら言葉を吐いた。「しかし、エニッド、僕はあなたを愛してゐたのです。」一息して再び語り續けた。「僕はそのことをいつかあなたに言つたことがあります。憶えてゐますか、ピアリッツであなたが何と言つたか。僕はあなたを愛してゐたのです。だから、僕はどうしてもあなたを助けようと思つたのです。」

すると、女は緊張して、しかも機械的に答へた。

「あたし達は、あなたのなすつたことを感謝せねばなりません。そのために危険から逃れることが出来たのですから。最初ボオルを連類に引き込んだワイルマルシユは、お義父さまが後悔のあまり白狀でもなすつては大變だと思つたものですから、何とかしてあたし達を監獄に送らうとして、あんなことを言ひ出したのですわ。」

「ヒュウ卿はあの通り、ワイルマルシユ一味の假面を引き剥いだのですから、それでもう過去のことは一切許されていゝ筈です。いろ／＼と世を騒がしたといふ結果にはなりません、しかし結局それはたとひヒュウ卿が買収されたとしても、誠實であつたことを示すものなのです。それはまた、狡猾極まる悪者どもに對して、毅然として戦ふためには、戀愛をも捨てたといふ勇敢な婦人が、すくなくとも一人だけはイギリスにゐたといふ證據にもなるのです。ねえ、エニッド。僕はよく知つてゐます。あなたは、僕のあなたに對する感情に十分に報いてくれたのです。」

「いゝえ、さうするのがあたしの義務だつたのです。」エニッドは伏目勝ちに謙遜しながら、「ともかく、あの陰險な悪黨醫師ワイルマルシユと係り合つたのが災難だつたのです。あれからといふもの、どれほど、あたしはあの醫師から離れようとしたこととせう。義父の招待で、あのドクトルが初めて家の晩餐會に来た時から、あたしは嫌な男だと思つてゐました。あたしが相談を持ちかけるやうな風をして手傳つてゐたのは、初めから、一つの目的があつてのことなんです。」かう力強く言ひ放つて、男の眼に見入つたエニッドの眼からは、火花が散るやうに思はれた。

「——目的つて、あのドクトルの正體——警察の耳に入つてからも半世紀にもなるといふ、あの危険極まりない盜竊、脅迫、偽造犯人の國際的同盟の巨魁ジョセフ・プロットといふ男の正體——を發いてやらうといふことだつたの。」

「それは見事に成功しましたね。根こそぎ計畫を暴露して、一大激動を惹き起さうと、あれほど巧妙な陰謀を企くでゐた連中の度肝を抜いておやりになつたわけですからね。だが——」と口籠つたまゝ、フェザーストンは鼻眼鏡の中から女の眼に見入りながら吐息を洩らしてゐた。

「だが——何ですの？」——男の様子が急に變つたので、エニッドは不審さうに尋ねた。

「一つ——たつた一つだけ、まだ僕には呑み込めないことがあるんです。エニッド、説明していた、きたいんですが。」と、遠慮するらしく、男は口籠りながら切り出したのであつた。

「何ですかしら？」眼敏く男の顔を見ながら、女が尋ねると、

「何時も解いていたゞけなかつた謎——ハリイ・ベレーヤーズの死といふです。」謎と、男は靜かに答へた。「あなたはベレーヤーズ君を大層尊敬していらつしやつた。愛していらつしやつた。」と、低く、殆ど囁くやうな聲である。

女は身を引いた。顔色は忽ち蒼白くなつて、額に手をあてたまゝ、ひどい打撃を受けたやうにちよつとよろめいた。

ウォルター・フェザーストンも驚駭に色を失つて、ちつと女を見つめてゐた。

三一

「あなたは真相を知つてゐるのでせう？」

たうとう、フェザーストンが口を切つた。嘗てエニッドを熱愛してゐた當時、使ひ慣れたあの物靜かな、同情に満ちた口調である。

エニッドはうなづいて事實を認めた。顔の筋肉が硬ばつて、首垂れたまゝ、俄かには見あげることも出来ない。

「あの人は殺された、——つまり、巧みに謀殺された——のでせう？」

數秒の沈黙を破るものは、戸外を過ぎる自動車の唸りばかりである。

「さうですわ。」——何か言ひ過ぎるやうな答であつた。

「あの日の午後、あなたは大尉の室を訪れて……」と、單刀直入男は斷定した。

「それは否定しませんわ。あたし、あの人に躓いて行きました。あの——あの人を救ふために……」

この最後の一句を、吃りながら吐き出す彼女の聲が、はつと途切れる隙に、涙が黒目勝ちの兩眼に浸み出た様子である。

「救ふ？——何から？ 死から？」

「いゝえ、あの人に仕向けられた大きな誘惑の陥穽に落ちることから——」

「誰の仕向けた？」

「あのドクトルの仕向けた誘惑です。二人は義父に紹介されて知合ひだったので。」

「ほんの偶然な機会から判つたのですが、何かの手段であの人までもいつか恐しい魔の手で拉ひ込んでしまつた例の醫師は、いつかあの人に近づいて瞞し込みました。ベレーヤーズには、ハットン・ガーデンの金剛石仲買人で、サーストンといふ知人がありました、この人の所有になつてゐる或る金庫の鍵の蠟型を、あの醫師がベレーヤーズに盗ませようとしてゐたのです。その報酬として、莫大な金を提供しようといつてゐたのです。——それはベレーヤーズの借金をすつかり綺麗にして、更に新しく牛計を立て直せる位の金額でした。弟のポップといふ人が失敗したため、ハリイはこの弟を何とかして救ひ出してやらうとして可哀さうなほど焦つた結果、殆ど破産したといつてもいゝ位の時でした。それを知つてゐたからこそ、今、あの人が大きな誘惑にあつてゐるかといふことがあつたしにはよく判つてゐましたよ。絶望した瞬間、あの誘惑をひよつとして承諾でもしてはならぬと思つて、あたしは前から約束をして置いて、ロンドンへ着くなり、あの人を訪ねたのです。従卒のパーカーを使ひに出した後で、二人だけで會ひました。行つて見ると、すつかり絶望してゐる様子ではありましたが、本當に嬉しいことには、友人を裏切るの嫌だといつて、ワイルマルシュに挑戦してゐました。」

「それから、どんな話が出たのです？」

「義父があゝの醫師の金を貰つてゐるのぢやないかと言ひ出しました。」エニッドが答へた。「そんなことのある筈はないといつて、あたしは大尉を説き伏せようと思つてゐましたが、大尉はワイルマルシュがそれとなく匂はした言葉から、いつかヒュウ卿の机の上で見かけた或る書類の謎が解けたと言つて、なかなか聞きません。」

「それで？」

「それで——」と、エニッドは口籠るやうに、

「たうとう喧嘩になりました。あたしは、義父を疑ふなんてあんまりだと怒るし、ハリイはハリイで義父の同類である、あの醫者に對する復讐に燃えてゐました。程なく、あたしは歸りました。それつきり、——それつきり、生きたあの人をまたと見ることは出来なかつたのです！」

「何が起つたのです？」

「何が起つたかは、この手紙が説明してくれますわ。」

さう答へながら、彼女は部屋を横切つて、プール細工の小箆筒に近づいて錠を開け、封印のしてある封筒を出して來た。そして封を切つて、フューザーストンに手渡ししながら、「これはハリイ、ベレーヤーズ大尉が最期の癩癩に震へながら書いて寄越した手紙です。内證にして、——義父にさへ内證にして置いたのですけれど……」

フューザーストンは、字も亂れた手紙を食るやうに讀んだ。終りになるほど字が一層震へ亂れて讀み

難くなつてはゐるが、真相は十分に物語られてゐるのであつた。――

「今夜、三十分ほど前に、」――と、瀕死の男は書き出してゐる。「御存じのドクトル・ワイルマルシュの訪問を受けました。二人だけで、誰も聞いてゐる人がないので、暴露して了ふ積りだとはつきり言つてやりました。初めは馬鹿にしてゐましたが、やがて心配になつたと見え、歸り際には貴女のことも買収に應じないといふのを聞いて、奴はたうとう嘲笑ひながら、別れの握手をしました。この悪漢の手袋には、針がさつてゐたに違ひない――掌がちくりと痛いやうな氣がしました。しかし何しろ激怒の餘り、その時は氣にかける餘裕もなくてゐましたが、奴が歸つてから十分程すると、變にポーッとし始めました。かうしてゐても、だんくゝ氣が遠くなるやうです。……ますますひどい。……變な感じが襲ひかゝつて来る。……死ぬんだ……毒殺され……犯人は……あの大泥坊だ！急いで来て下さい……直ぐ……エニッド……そして信じさせて下さい、あいつの言つた悪口が……偽だといふことを。あんなことが本當の筈はない。……遅れないやうに、急いで……あゝ、もう書けない。――ハリイ。」

死に瀕した男の最後の努力である、この劇的な手紙を讀み終つた一瞬間、フェザーストンは息も吐くことが出来なかつた。

「さうだ、ワイルマルシュの野郎、露見を恐れて、大尉を殺しやがつたな。」低い嗚聲で呟いた。「審問廷で何故これを提出しなかつたのです？」

「その理由は――」と、エニッドが答へた。「あの醫者の復讐が怖かつたからです。その上、こつちら申立は否認しようと思へば、譯なく否認出来ずもの。さもなければ、あたしが事實を知つてゐるのしい様子だつたら、また同じ手段であたしの口を塞ぐことも出来ますもの、あの悪者には。」

「さうだ、故人の告白は疑ふ餘地はない。」
今は、フェザーストンも斷定を下した。「あいつ、恐ろしい毒薬を使ったのだ。――痕跡を残さぬやうな新薬だ。――何にしても、犠牲者はこれが初めて、はなれないに違ひない。ところで、お義父さんは、勿論この手紙を御存じないのでせうね？」

「え、誰にも祕密にして置きましたから。呼出し狀は破いちやつたつて言つてあるんですの。」
「エニッドさん、さういふ事情なら、僕に預らしてくれませんか。トレンドールに見せたいから。」
「トレンドールさんなら、よござんすが、どうぞ、當分は、あの方だけにお願ひしますわ。」

一歩近づくなり、フェザーストンはもちくしてゐる女の手をとつた。エニッドの眼に現れた歡喜の光は、女もまた男の手に報いてゐることを物語つてはゐたが、どこか躊躇らふ様子が見えるのは、自分がこの大きな愛に値しないといふ意識の表れなのであらう。

「約束します。」と、力強い、男らしい小説家は囁いた。「本當はもつと早く打明けなければならなかつたのですが、つまらぬ疑ひのために、それが出来ませんでした。許して下さい。僕はあなたを愛してゐます。――さうです。あなたにお會ひするまで、あなたの手を握りしめるまで、本當の愛といふ

ものを味はつたことがなかつたのです！」

エニッドの純情な、しかも重荷を負ひ疲れた心臓は、たゞ燃えるやうな男の求愛に應ずるばかりだつた。男に手を焼かせながらも、何時かその胸に抱かれてゐた。一切の過去を消し去るもの、如く、二人の唇は、情炎の抱擁の中に接けられて、いつ離るべしとも思はれなかつた。熱い愛の言葉を男が早口に女の耳に囁き込めば、あの暗い出来事の數々を生きて来たエニッドも、あまりの幸福さに、かくまで大きな歡喜に待たれる身とは信じ兼ねる様子で、いつまでもくゞフェザーストンの腕に抱かれたまゝ、沈黙の満足な味はひ盡してゐた。あゝ、この熱い接吻こそ、彼がエニッドの眞紅の唇に跡づつけた最初のものだつたのである。

二人はいつまでも抱擁を續けてゐた。二つの赤い心臓は響きあひ、唇は相交はつたまゝ、初めて知る完全な愛の恍惚境に、二つの魂は残りなく融け合つたのである。

戦はいかにも烈しい戦であつた。しかし二つの純情には遂に勝利に輝く日が来た。かうして優しい愛の言葉を囁き交してゐる最中、いつかエニッドはこの恐れなき誠實の人の妻たることを誓つてしまつたのである。この勇者によつてなされた犯罪捜査の偉業こそは、曾て國民の夢想だにし得ぬ所であつた。國民はこの勇者の著書を讀んでその虜となることは出来る。しかし思ひを遠く馳せて、この勇者が大犯人の追跡に深更微睡だにせぬ慧眼であり、今彼の良妻たるべき、眉目美しい處女がまた、生命も愛も名譽も、一切をあげて愛人を助ける人だといふことを知るものは少い。

翌日の午後、ヒュウ卿はホールズ街の薄暗い室にウォルター、フェザーストンを訊ねて来た。二人が席についた時、老將軍は、長い、幾分は苦痛をさへ伴ふらしい沈黙の後に口を切つて、――

「フェザーストン君、君は、わしのやうな位置に居る者がどうしてあんな盜賊團にかゝりあひを持つたのかと、御不審のやうぢやが……」

「左様、不思議に思つてをります。」

「では、簡單にいふと、こんな次第なのぢやが……」老將軍は語り出した。――

「大戦の勃發する直前のこと、まだ少佐でインドに駐在しとる當時、わしはひどく金に困つたことかゝら、遂に過誤を犯したのぢや。――それが露見の曉は、早速臈首の問題になるほどの秘密洩洩事件でな。しかし、開戦後歸還を命ぜられてロンドンに戻ると、程なく、ワイルマルシュといふ奴が、わしに近づいて来た。驚いたことに、こいつ、わしの事件を、何としてか、嗅ぎつけて来たのぢや。最初は有徳の君子らしく、わしを責めて告發するといふので、わしも弱身のつらさで、しきりに頼つて留めとつた。二週間ばかりといふもの、このお蔭で、わしは絶望の惱みを嘗めてをつたわけぢや。すると、あいつ、ある日また訪ねて来て、わしにも可成りの金が入る計畫を持ち込んで来てな。實際、わしの助力に對しては、年金を提供するといふのぢや。」

「その時、あいつを醫師とお考へでしたか、それとも何かほかの――」

「いや、頭から醫師と思ひ込んで。まさか、あいつらの仕事で國家の信用すら危殆に瀕する程の、

大規模なことをやる盗賊團の巨塊などとは、つい先頃まで夢にも知らんかつたのぢや。一と、ヒュウ卿は答へた。「あいつの接近して来た當時、わしは経理局にをつたもんで、毎週わしの金庫を通る金は、大藏證券で数千磅に上つて居た。ワイルマルシュはわしを唆かして、この證券が大藏省からわしの手許に入つて来たところを、自分の持つて来た奴と掏替へてしまへといふ。見本の偽證券を見せとつたが、なか／＼うまいもので、わしなどには本物と區別出来ん程ぢやつたよ。

「わしは迷つた。何しろ、ひどい困窮ぢや。立派に軍人らしく面目や地位を保たうとすれば、絶対に金が要る。この兩目的を一致させ兼ねて、長いこと苦しんで居つた時ぢや。かう好餌を眼の前にぶら下げられては、いかにも氣を引かれるわい。それで、——うむ、それで、遂にわしは負けた！」

老將軍は唸るやうに言つて、暫く言葉を切つてゐたが、また語り續けた。

「わしが本物と掏替へた幾束もの偽證券を、ワイルマルシュがどこから持つて来るかは、勿論、判らなかつた。だが一度道を誤まつた以上、わしには最早それを穿鑿立てすることは出来んことぢや。つい最近まで、わしは奴の正體を知らなかつた。竊盜、脅喝、偽造、何でも大仕掛にやつてのける國際的盜賊團の巨魁とは知らなかつたぢや。あいつがベレーヤーズにハットン・ガーデンの金剛石商人の金庫の鍵型をとらせようとしたのも、かうなつてはもう明らかな事實に違ひない。ベレーヤーズはあいつの要求を一蹴して告發すると威喝したものでぢやから、可哀さうに、早速あの惡黨のために、口を塞がれてしまつたのぢや。實際、あいつと來たら、自分の罪の祕密を保つためには、何でもし兼ねぬ

奴ぢやからのう……」

「だが、あなたは、どうして關係をお断ちになつたのです？」

「休戦になる直前ぢやつた。ワイルマルシュの一黨は、物凄い大惡計を企んで、歐米兩大陸に偽造紙幣の洪水を起さうとした。事露見に及べば、——勿論、遅かれ早かれ露見するには極つとるが、——國家の信用が害さるゝわけぢやが、奴の一黨には巨額の富が轉げ込むことになるのぢや。しきりとわしに加盟を求めて、合衆國に渡り、そこで巨額の報酬を受けて一黨の手足として活動せよといふのぢや。奴等に見れば、嫌疑の及ばぬ高位の人間が一人ぐらゐ必要ぢやつたわけで、つまり、わしを道具に使つて、この大詐偽を働かうとしたわけぢや。」

「それで、うまく拒絶なさつたわけですか？」

「さうぢや、わしはこの上は惡事をやめて、時折、奴の置いてゆくかなりの金も受入れぬことにきめた。そこでわしは経理局を退いてしまつたので、これには奴も随分困つたらしいが、結局もう利用は出来んといふことになつたのぢや。」

「では、あなたを脅迫したでせう？」

「うむ。絶えずやつとつた。わしを紐育へやりたいらしかつたが、エニッドの力添へで、わしも勇氣が出て、斷然要求をはねつけてやつた。すると、卑怯な復讐法を考へ出して、ル・ポントワが偽造犯人で、エニッドとわしが共犯だと匿名で告發したのぢや。奴の詭計で、わしの金が偽造證券と取り

替へられ、ボオルは疑ひもせず、これをリヨン銀行に送つてゐたのだ。フェザーストン君、君の時宜を得た忠告がなかつたら、今頃はきつと、我々父娘もまたフランスで逮捕されてゐたに違ひない。」
「さうですね。私が注意して見てゐると、どうもあなた方の身邊が危険だと判つたものですから。だが、實際のところ、あの時の私の形勢は實に苦しいものでした。勿論、實際の事は判つてゐなかつたので、正直に申し上げると、エニッドさんとあなたはお二人とも何か非常に重大な犯罪に捲き込まれてゐるのではないかと思つてゐました。」

「いや、實際に捲き込まれてゐたのぢや。」と、老將軍は低い苦しげな聲でつぶやいた。

「なるほどね、しかし、あなた方お二人は大藏省にとつて、夢にも想はなかつたことを知らし、パリやブラッセルにゐる奴等一味の住所氏名さへもみんな判り、證據もあがつて、もう捕縛されてゐますよ。あなたは全く國家の重大な危機を救つたのです。」

萬一、不幸にしてこの悪企が成功してゐたとしたら、紙幣はみな疑はれるといふやうなことになる。由々しい事態を惹き起したことでせう。だからして、當局も、悪漢一味を逮捕し、印刷機を押し、電光石火的に事件を片づけることが出来たのです。」

「君は一體そのことを御存じなのか。」ヒュウ卿は突然に眼を輝かしながら尋ねた。

「え、今朝トレンドールから聞きましたよ。」

「あ、有難い、それでわしも、やつと再び世間に顔向けが出来ますぢや。神様だけは、わしが戦時

中の幾年間、どんなに苦勞したかを御存じの筈ぢや。わしは一生懸命に罪滅ぼしをした。感謝しますぞ、フェザーストン君。」

三三二

事件の後日譚を手短かに物語らう。世間一般にはまだ事の真相が判つてゐないのだから。

悪事を取り除いた後には、非常に善いことが廻つて來た。次の日の晝頃、トレンドールは別稱マイルマルシユ事ジョセフ・プロットをチエルムスフォードの監房に訪ねて行つた。この會見でどんなことが起つたかは、遺憾ながら我々は知らない。だが、ハリイ・ベレーヤーズが書いたあの最後の手紙がその場で示されたことは想像に難くない。(もつともエニッドは、もう必要がないからといふ理由で程なくその手紙は取り下げてしまつたが)

犯罪捜査局長が去つてから、一時間ばかりたつと、犯人は、上衣の襟に隠し持つてゐた短い、穴のあいた針を自分の腕に突き刺し、冷たくなつて死んでゐるのが發見された。一味の陰謀は全然失敗に終つたので、グラニエとその下男ピエトロは身柄をフランス官憲に引き渡された。さうして澤山の寶石類や藝術品や、金や、いろいろの有價證券はフォンテンプロオの附近にある別荘から掘り出され、みんな元の所有者に返された。

ワイルマルシユがハノーバー・スクエヤのセント・ジョージ監獄で死んでから十四日はかり過ぎた

頃、エニッド・オールバアは正式にウォルター・フェザーストンの妻になった。結婚式に臨んだ凡る地位の、凡る職業の人々は、皆この結婚を興味深く見た。しかも、この結婚を最も歓迎したのは、何を隠さう、ロンドン警視廳上下各階級の官吏達であつた。

ウォルターとエニッドとは、平らかな芝生があり、薔薇色の楊梅の蔭があり、そして常春藤のからまたゐる懐しいサセックスの家で牧歌的の幸福な生活を送つてゐたが、しかも二人は、あの思ひ出多いアイヌウォースの小屋をも忘れることはなかつた。そして村の人達には、尤もらしい口實を設けて「モウルトゥッド氏」といふ名前を、ウォルター・フェザーストンに改めたといふことにした。

英國におけるいかなる夫婦と雖も、今日の二人のやうに幸福なものは恐らくはないでならう。また、いかなる男と雖も、エニッドほど愛らしく、しかも頼りになる同伴者をもつてゐるものはないであらう。二人の生活こそ、全く、完全な、平和な、甘美なものだつた。

かうした静かな田園にゐても、フェザーストンは決して懶けるやうなことはなかつた。世界の人々の胸に感激を燃え立たせる例の神秘的な物語に筆をとりながら、一方また、その半分の時間は、刺戟と冒険を求めて、より大きな犯罪事件の探偵に身を捧げ、探偵の結果は再び逆にその作品の中に反映せられて、ますます面白い物語が作られていつたのである。

ピムリコの博士 終

緑の扉

緑の扉

—

二月十七日の朝「紐育センチネル」の人事欄に次のやうな広告が載つてゐた。

幽霊の出来る借家を求む。成る可く市外。當方眞面目なる靈魂現象の研究生。御一報を乞ふ。但し御擲諭無用の事。三八七番宛。

二日後の朝、目立たぬ風采をした一人の男が五十番通りで下車すると、あちらこちらを探し廻つた。遂に小さなアライアン・ホテルに入つて行つた。帳場で名前を告げると、その男は六階に上つて行つて、六百十二號室の呼鈴を鳴らした。

直ぐに扉が開いて、頑強な男が現れた。頬が垂れて、前額が綺麗に禿げ上つてゐた。その男の冷淡な、それでゐて見透すやうな視線に會ふと、シルヴェスター・トレントは何かしら氣遅れがした。

「モルティマー・フェルスさんでいらつしやいますか。」
トレントが訊ねると、大きな男は肯いた。その唇は薄く、熱心に何か見つめる時、下唇を噛み

しめる癖があつた。

「トレントさん、まあ、お掛けなさい。」男は妙に抑揚のない聲で言つた。

「あなたは荒れた借家をお持ちださうで……」トレントは微笑を深はせながら、

「センチネル新聞の廣告に對するあなたの御返事に就いて、御相談いたしたいと存じまして、伺つたやうなわけですが……」

「あ、さうでしたか。あなたの廣告は風變りなものでしたね。」フェルスの聲はその眼と同様に冷たい感動のないものであつた。「だが、一體、何のために荒れた家などお探しになるのです？」

「あの廣告で御判りになりませんでしたか？ 實は私、靈魂現象の研究がしたいのです。」
フェルスがあまり立人つた穿鑿をするので、少しもじくしながらトレントは答へた。

「とおつしやると、幽霊だとか、そんな風なものをですか。」

「さうです。世間では一般にさう言つてゐますね。新聞は大部分、非科學的な人達に讀まれるので、私の廣告にも非科學的な語を使つておきました。」

フェルスの唇が微かに動いた。それは冷たい微笑であつた。部屋は派手な飾り付けがしてあつたが、しかし、何となく陰氣だつた。窓には半分覆ひがしてあつて、僅かな光線が射しこむばかり。彼の衣服は、濛い落ちていた色をしてゐたけれども、地質は素晴らしく上等なものであつた。それでモルティマー・フェルスが金持であり、上品な趣味を持つた人であることは明かだつた。

「では、あなたは神祕なことを研究なさるのですね。」暫らくしてフェルス訊ねた。

「さうです。」トレントは遠慮勝ちに、
「私はさういつたことに就いて二三論文を發表しました。もしあなたがその雑誌をお読みでしたら、私の名も御覧になる筈ですが……」

「いや、私は一體に雑誌を讀まない男なんでね。……それで、あなたの廣告に對して幾通返事が参りましたな？」

「三通参りました。しかし他の二通のにはもう會つて來たのですが、駄目でした。」

「どうして？」フェルスは、何か意味あることが隠されてあるのを感じするかのやうに、強い疑問の一語を放つた。瞬間、困惑の色がトレントの眼に浮んだ。彼は答辯に窮してゐるやうであつた。

「廣告の中にあれ程注意しておいたのに、向うさんでは眞面目に考へてくれないものですからね。」トレントは聲を落して、これで十分な説明になるかどうか、心配さうにフェルスの顔を見ながら答へた。

「さういふ人は何時でもおどけたことを差控へることが出來ないのですね。」

フェルスは如何にも同意したやうに大きく肯いた。「それで、荒れた家にどんな風にしてお暮らしになるつもりですか。」

「まあ大抵の時間を讀書と著述で過したいと思ひますが、私の仕事は全く一人である必要があるのです。

私は靜かな研究生活を始めたいので、下女さへ邪魔なといふわけで、それに私は自炊の心得もありますから、一人でも大丈夫生活が出来るのです。」

「あなたは身許證明書をお持ちでせうね。」

トレントは小さな紙挟みから書類を取り出した。フェルスは注意深くそれを讀んでゐたが、非常に満足したやうな様子で、

「これで十分です。」と、書類を返しながら言つた。彼の冷たい様子は、數分前からよほど打解けたやうであつた。「人は注意し過ぎて悪いと言ふことはありませんからね。」彼は辯解らしく附け加へた。「どうか私が色々立入り過ぎた質問をしたことをお氣にかけないで下さい。トレントさん、私は丁度あなたに適當な家を持つてゐるのです。それは私の遠い親戚に當る者の持物なんですが、その一家のことを私に委されてゐるのです。その主人は女ですがね、今病氣靜養のために外國へ旅行してゐます。家はすゝぬぶん丈夫に作られて、西チエスター州の一番好い位置を占めてゐますよ。その地所を買つて後暫らくの間私の親戚も住んでゐましたが、夜になると不思議なことが起ると言ふので、間もなくそこを立退いたのです。」

「ほんたうですか？」トレントは幾分息をはずませて訊ねた。「それであなたは、もう少しはつきりしたことを御存じぢやないのですか。」

フェルスは下唇を噛みしめた。以前の疑惑の面影がまたチラと現れた。「私は確かには知らない

のです。その家に幽霊が出るなんて、たつた一人の経験で斷言出来るものぢやありません。ピアトリ
ス・ファード嬢——これが家の持主の婦人の名前なんですが——この人は餘り話好きな方ぢやな
いのでね。それで私も詳しくは聞きませんでした。一體この人は神經質な婦人で、何時も幻想が實
際のことと思へるのですよ。しかし幽霊が出たりするやうな荒れた家をお求めなら、シエー
ドローンは、あなたの思召に適當な所だと思ひますね。」

「シエードローンですつて？」トレントは幾分震へを帯びた聲で訊き返した。

「さうです。シエードローンといふのが、その土地の名なんです。」フェルスは濃い眉をしかめなが
ら説明した。「以前は有名な賭博者の持物で、そこは賭博場になつてゐたんです。紐育社交界の人
人は屢々そこに出入りして、夜毎に數萬の富を争つてゐたのです。しかしこれはずつと昔のことで、
シエードローンの名高いのは、集會場として、その建築の堅牢な點にあつたのです。私はこの評判が
何時までも續けば、屹度い、金で借り手があると思ひました。ファード嬢は中々の儉約家です
が、私が勧めたので、そこを買取つたといふわけで、私は幾分そのことに就いては責任を感じてゐる
のです。トレントさん。私はあなたを、ほんたうにい、借り手だと思ひますがね……」

「一體どんな風の建築なんですか。」

「家は全部漆喰と石で出来てゐて、高い塔があるのです。そこは高地になつてゐるため、晴れた日な
どは、數哩距つた所からも塔が見えます。内部は古風な裝飾がしてあつて、大きな煖爐や、高いフ

ランス風の窓もあります。」

フェルスは聲を落してトレントの顔を見た。彼が塔のことを話した時、トレントの顔に興奮の色が
ちらと現れた。すぐにそれは消えてしまつたが、フェルスには不思議なことに思はれた。

「大變面白い所ですね。」トレントは呟いた。「幽霊などの出ると思はれてゐる所には、きつと何か物
語のあるものですが、シエードローンにも同じやうに何かあるんでせうね。」

「全くです。トレントさん。」再びフェルスは眉をしかめた。「シエードローンにもそんな話があるん
ですよ。その賭博者はアーノルド・ワードローと言ひましたが、この男が死ぬ少し前、官憲との間に
問題を起して引退しなくてはならなくなつたのです。そこでシエードローンはもう集會所ではなくな
りました。ワードローは死ぬまでそこに住んでゐました。」

「突然な死に方でもしたのですか。」

フェルスは策略ありげに半ば眼を閉ちて不思議な微笑をもらした。「あ、私はうつかりしてゐま
した。實際はワードローが死んだのか生きてゐるのか、ほんたうのことを知つてゐる人はゐないので
す。數年前のある夜、その男は突然姿を消したのです。殺害されたのだらうといふのは人々の想像な
んです。」

「え、想像に過ぎないんですつて？」

フェルスの冷たい眼は、トレントの顔をぢつと見つめた。彼は語を繼いで、

「警官達が入つて見ると、家の中にはあらゆるものが散らかつてゐました。ワードローの寢室には激しい捲開の跡がありました。そして青い絨緞の上には、どす黒い血が流れて、まだ乾いてゐません。ワードローの姿も見えなければ、その日一日何の手掛りさへもなかつたのです。もしあの男が殺害されたものとすれば、殺害者はよほど巧妙な手段で死骸を隠したものに相違ありません。」

「何といふ恐ろしいことでせう。」トレントは叫んだ。「それで誰かその事件を解決しましたか。何かワードロー殺害の動機があつたのですか。」

「ワードローは冷淡で無口な、奇妙な性質の男でした。或る人はこの男が、不運な戀愛事件に思ひ餘つてゐたとも言ひますが、しかし、どこまでも信用のおけるものではありません。引退してから、家の後の花園をぶらぶら歩いたり、書齋で讀書したりして日を過してゐました。時には旅行などもしてゐましたが、どうかすると数週間も歸つて来ないこともありました。その度に一層無口になつてゆきました。スローアンといふ村の老人が、一度ワードローに口を利かせようとしたことがありましたが、ワードローが何も言はないで、ゼロツと見た時の顔を忘れることが出来ないとやつてゐました。」

明かにトレントは興奮してゐた。彼は靜かに坐つて、話手の顔を見つめた。「それでワードローには親戚といふのはなかつたのですか。」

フェルスは驚いた。そして油断なくトレントを見つめた。

「トレントさん、私にはあなたが何故そんな質問をなさるのか判りませんがね。」

「何故つて、そんな、そんな深い理由があるのぢやありません。ほんの偶然の質問なんですよ。」トレントは非常に不愉快な様子をした。

「それで、シェードローンに出るといふのはワードローの幽霊なんですか。」

「私の少しも知らないことを、あなたはお訊ねになりますね。それは、あなたが御自分で見つけ出された方がいゝでせう。私はそんなことには全くの素人なんですから。」

「え、いろいろ面白いお話を伺つて有難うございました。では、その家を借りることにしませう。家賃は一體いかほどでせうか。」トレントは呟くやうに言つた。

フェルスは躊躇ひ勝ちに金高を言つた。トレントから幾枚かの紙幣を受取ると、受取證を書いて、新しい借家人に渡した。

「ありがとう。」トレントはポケットにしまひながら言つた。「フェルスさん、ほんたうにお世話になりました。では、さよなら。」

彼は愉快さうに笑つて帽子をとると、何時ものやうに靜かな足取りで出て行つた。彼はその時フェルスの様子が變つたことには全く気がつかなくなつた。

フェルスは扉の邊りを窺ひながら、机の上をコツコツと叩いた。彼は火の消えた葉巻を噛みしめながら、何とも言へぬ表情をした。

「シルヴェスター・トレントさん、あなたは餘程の馬鹿か、それでなきや大それた悪黨だね。」フ

ルスは長い間考へた後で、吐き出すやうに呟いた。

二

翌日の午後遅く、新しく滞在する場所を見た時、トレントは、フェルスとあんな風に口論めいた話をするのでなかつたと後悔した。その家は樺や楓の点在してある凸凹のある斜面の頂上に建てられ、邊りは淋しい田舎で、彼がフェルスに言つた研究のためには全く申分のない所であつた。凹地には雪が吹き寄せられて、晩い午後の太陽が鈍く光つてゐた。ヴリアヴィルの村までは半哩以上もあつた。灰色の石で出来た大きな低い屋根の家が、シェードローンからは唯一つ見えるばかりであつた。「全くこれや素敵だ。」陰氣な景色を眺めながら、トレントは叫んだ。「それに静かで、人家から遠く距つてゐるのだもの。フェルスはこのことは別に話さなかつたが、やはり私の思つたとほりだ。全く、靈魂現象の研究には理想的な所だ。」彼は、シェードローンに来るやうになつた他のもつと重大な目的を思ひ出して、皮肉な微笑を洩らした。もう一度景色を眺めてから家の中に入つた。停車場から配達夫が運んでくれたトランクや鞆は、もう綺麗に片付けて置いたので、彼は薄暗い書齋でゆつくりと頁をのみはじめた。

彼はフェルスに語つたやうに、もの靜かな、研究好きの性質であつたが、そのほかに同情深い性質や、強い好奇心をも持つてゐた。かうした性質が、彼をシェードローンに来させるやうにしたし、不

思議な出来事から、そこに滞在させるやうにもしたのである。

彼はこれまで僅かな収入で、紐育の或る廣場に面した一室を借りて、些やかな生活をしてゐた。自分の好き氣儘にどんな暮し方をしようと自由であつたが、大抵は書齋で日を送つた。その書齋には難解な書類や、隨筆や詩や、それに幾冊かの小説なども雑然と混つてゐた。彼はやつと三十一になつたばかりであつたが、年よりもずつと老けて見えた。

トレントの唯一の氣晴らしと言へば、それは夕方、長い間散歩することであつた。それも時々全く知らない土地を散歩するのが好きであつた。で、或る夕方晩く、停車場近くの群集の中をぶら／＼歩いてゐる時であつた。誰かポケットに手を觸れたのを感じた。急に振り返ると、みすぼらしい装をした病身らしい青年が驚いてトレントのポケットから手を引込めた。その男は普通の拘摸とは思へなかつたので、トレントの好奇心は急に湧きあがつてきた。

「失禮ですが、どうか一緒に来て下さい。」さう言つて、靜かに、しかし、しつかりと青年の腕を掴んで意味ありげに、交番の方を眺めた。

「あそこの奴が君に目をつけてゐます。何彼と言つてくるといけませんからね。」しかし、それよりも、トレント自身が黙つてゐることが必要であつたのだが、とにかく何とか説き伏せて急ぎ立てるやうに青年を自分の部屋へ連れて來た。青年は病氣してゐた。トレントはかるい食事を攝らせ靜かに寝かせてやつた。青年はクライド・ノルトンと呼ばれ、素晴らしい冒険に富んだ生活をして來た男であ

ることがわかつた。年頃は二十三四のやうに思はれた。今こそ熱のために瘡せ衰へてはゐるけれども、以前は立派な體格をしてゐたことが窺はれた。

その夜遅く、醫者が立ち去つてから、トレントは青年の枕頭に坐つて、その奇妙な讒言を聞いて途方に暮れた。時々、ノルトンは床の上にもつくり起き上つて、意味ありげな調子で一言二言口走つた。その言葉から、消すことの出来ない印象をトレントは受けた。一度、病人は妙に緊張した聲で、人の名前らしいものを口走つた。それは「ヴィオラ・デーン」と言つたやうに思はれた。暫らくして、彼は一層大きな聲で「シェードローン」と叫んだ。その後は低い聲で口籠りながら「幽霊の出て家」「塔」「緑の扉」——かうしたきれぐれのことを苦しげに言つた。後の言葉は殆ど聞きとり難いほど小さな聲であつたが、トレントの耳にはそれがはつきりと残つた。

翌日ノルトンは息を引きとつた。そのポケットには、經歷だとか、家庭の關係だとかに就いて手掛りとなるやうなものは何もなかつた。僅かに判つてゐることは、彼が不運な放浪者であつたことだけであつた。トレントは葬式の費用も拂ひ、共同墓地に埋葬するまで見送つた。そして彼の棺の上に一塊の土を投げ落す時、これで、若い放浪者が存在してゐたといふ秘密も永久に閉ぢられてしまふのだと思つた。この偶然な出来事も明かにこれで終つた。しかしトレントは、青年が言つた讒言の裏に隠された秘密に就いて、その後毎日考へつゞけた。恰も自分がその秘密を解決しなくてはならない義務があるかのやうに思つた。トレントは彼が未解決の問題に就いて思ひ餘つて苦しんでゐたのだと思

はれてならなかつた。

その夜遅く、書齋で、ノルトンの残した言葉を繰り返してみた。「シェードローン……ヴィオラ・デーン……塔……緑の扉……荒れた幽霊の出て家」一つ一つには何の意味もないそれらの言葉が、どんなよりした眼光を見せて死んだ青年の幻をつくり出した。次ぎにトレントの心は、いくらかの記憶の断片を集めて、一つの想像を編みあげた。彼は、停車場で青年が拘捕をしようとしたことに何か重大な意味が含まれてゐると思つた。多分それも偶然なことであつたかも知れない。しかし、ノルトンが何處かへ行きたく思ひながらも、汽車賃を拂ふだけの金がないので、前後の思慮もなく拘捕をしようとしたのであるとかがへることは出来た。もしさうであつたなら、彼が失敗したといふことは非常に残念だつたに相違ない。トレントは、青年がそんなにも行きつたがつてゐたのは、シェードローンではなかつたかとかんがへてみた。いろいろに推測してみた。地名辭書を繰つて見たけれど、シェードローンと言ふところは載つてゐなかつた。誰に訊いても知つてゐるものはなかつた。が、それは別に何でもなかつた。多分シェードローンは小さな、そして別に重要でもないところであるらしかつたから。

トレントは、こゝまで臆測してきた時、ひどく興奮した。シェードローンに行けば、幽霊の出て家も、塔も、緑の扉も、そしてヴィオラ・デーンさへも見つけ出すことが出来るに相違ないと思つた。青年の残した言葉が頭の中でぐるぐる渦を捲いた。彼はいろいろな方法で調査したけれども無駄であ

つた。そこで、遂にそれと氣づかれないやうに新聞へ廣告をしてみようと思つた。もしこれ以上に直接な手段で解決しようと思つれば、きつと誰かに疑はれて最初から妨害を受けるにちがひなかつた。とにかく、クライド・ノルトンが殘して行つた秘密は、手早くしかも用心深く處理しなくてはならないと思つた。もし運よく廣告から何かの手掛りが得られたとすればそれでいゝとして、萬一にも失敗するやうなことがあれば他の方法をとることにした。……

そして今、彼は暗い書齋で好きな菸を煙らしながら、廣告の結果が巧く行つたことを喜んでゐたのである。フェルスから、簡單ではあるけれども、シェードローン塔に就て聞くことが出来て、やはり、自分の試みが正しかつたと思つた。しかし一面、それほどまで幸運であつたとも思はれなかつた。それは家を借りるのにあまり熱心になり過ぎたために、ともすると疑はれさうだつたことである。フェルスが借家欄でトレントの廣告を見て、彼にシェードローンを貸さうとしたのは極めて當然のことであつた。しかもフェルスの話とノルトンの殘した言葉とは、何等暗合するところは見出されなかつた。それに氣づかないやうに見せかけてはゐたが、フェルスが大切な點に觸れると、妙に言ひ盡つたり、言ひ抜けたりするのを見てとつた。トレントはフェルスがまだ多くのことを知つてゐるにちがひないと思つた。

次第に濃くなつて行く闇の中に、トレントはますます想像を逞しうして行つた。外は空さへ暗くなつて雪がチラチラ降つてきた。家の中は靜まり返つて、古い建物のメキメキと言ふ氣味悪い音が、時

時響くばかりだつた。トレントは眞暗な書齋の一隅を見つめながら、暗い靜かな部屋を通つて、アーノルド・ワードローの魂魄が現れて來るのだと思つた。部屋の中には不安の氣が充ち溢れてゐた。

トレントは肩を縮めて、パイプの灰をたき落した。深い空想からはつと覺めた。彼は着いて間もなく、まだ明るいうちに家の様子を見て置いた。そして、古い型の緊りした構造や、その中に近ごろ出來た新しい器物がゴタゴタ置いてあるのを見たのであつた。それらの器具は、フェルスの言つた親戚の女が持ち込んだものであるが、確かに古代の威嚴と寂しさをそなへてゐた。彼は電機装置や爐の具合まで調べた。

次第に迫つて來る暗の中で、トレントは庭の木や石の奇妙な形を見つめながら、窓の近くに坐つてゐた。楓が、河面から吹きあげてくる冷い風に、カサカサ鳴つてゐた。再び彼は、死んだ放浪者と、あの辻褄の合はぬ謔言を思ひ出した。ノルトンの言つた緑の扉はまだ見つけ出してゐない。ヴィオラ・デーンも、まだ單に人の名前に過ぎない。しかし何となくその名に惹きつけられた。シェードローンの秘密とその女との間、殊にアーノルド・ワードローの悲劇的な運命との間に何等かの關係を見つけ出さうとした。

かうして空想に耽つてゐる最中に、突然、玄關の方にあたつて人の聲音が聞えて來た。驚いて窓から覗いた。風にひらめいてゐる長い外套をつけた人影が、ぼんやりと彼の眼に入つた。その瞬間、呼鈴の響きが、不氣味に家中へ響き渡つた。

トレントは急いで電燈をつけた。まだ六時前であつたが、外はもう眞暗だつた。彼は訪問客を内へ導いた。それは二十三歳の女だつた。女の大きな黒い瞳は、書齋へ案内される間中左右を不安げに眺め廻した。一心に歩いて来たせゐか、女は息をはずませてゐた。女の顔は青白く、たゞ冷い風の吹きつける両頬ばかりが赤かつた。その女は立派な頭巾を被つて、頸には毛皮の衿巻をつけてゐた。トレントはこの不意な訪問の意味を知らうとしながら、女に椅子をすゝめた。しかし女には、トレントの言ふことが聞えないらしかつた。女は書架の上にかゝつてゐる一枚の油繪に氣がついて、驚いたやうに見つめた。トレントは、最初にその部屋を見た時、その肖像畫には氣づいてゐた。それは、年頃四十がらみの口髭のある鋭い眼をした男の肖像であつた。廣い額には、房々したちげれ髪が亂れかゝつてゐた。そして顔ぢうには思案に暮れた陰影が見られた。暫らくの間若い婦人はトレントのゐることを忘れたかのやうだつたが、ふと我に返つて、急に彼の方へ臉を向けた。

「シルヴェスター・トレントさんでいらつしやいますか。」女はたづねた。

彼は、もしかするとこの女がヴィオラ・デーンではあるまいかと思ひながら、丁寧に挨拶した。女の胸には何か苦悶が起つてゐるらしかつた。

「わたしはヘンリエッタ・ウェストと申します。」トレントはこれを聞いて軽い失望を覺えた。

「はい、あの、村の宿屋に泊つてゐるものでございます。」

彼は肯きながら、女の話しつゞけるのを待つた。しかし女は、何のために訪問したかを説明するのに苦しんでゐるかのやうに、瞳を落して、あてもなく床の上を見詰めた。それからもう一度、書架の上の肖像畫を見あげた。

「突然に伺ひまして、お邪魔ぢやございませんでしたかしら？」トレントの方を見るでもなく女は呟いた。「突然に上りましてよくないことは無論存じてをります。でも是非ともお話しなくてはならないことがございまして。」

「いゝえ、御心配には及びません。私はあなたがお訪ね下さつたのを喜んでゐるのです。どうか御自由になすつて下さい。」

「それで、あなたはこゝへずつとお留りになるお考へなのでございますか？」

「多分ずつとゐることになりませう。」

「こゝは變な所なんでございますよ。殊に冬なんかは……」

「だけど滞在するだけの價值がありますよ。私はよく幽霊の出る家の話を聞かされて、そんな處に住んで見たいものだと思つてゐましたが、ちやうどいゝ機會が來たのです。」

「あなたはほんたうに幽霊などといふものを信じていらつしやいますか？」女は彼が率直であるかと

うかを試みるかのやうに、大きな黒い瞳を見張つてたづねた。

「何故です？ 私が保證するよりも、多くの人々が、既にさう信じてあるぢやありませんか。とにかく、私は偏重な氣持から逃れて、科學的にこの問題を研究したいと思つてゐるのです。時に、あなたはこの書架の上の肖像畫に大變目をつけられてゐるやうですが、多分ほんたうの人を御存じなんですかね。」

抵抗することの出来ない何かの力が、女の眼を壁の上の畫に惹きつけるやうに思はれた。女はかすれた聲で呟いた。

「その人は亡くなりましたわ。」

「ぢや、この人といふのは、この家に住んでゐたアーノルド・ワードローヂやありませんか。その男を御存じなんですか。」

「いゝえ、わたしには、これがあの人の肖像畫だと斷言することさへ出来ませんわ。たゞこんな肖像畫が家にあるといふこと、これがそれだつたといふことしか存じませんわ。何でもワードローヂさんの友達がこれをお描きになつたのだといふことは聞きました。多分この畫が立派に出来てゐるので、次の持主の方も別にお取りはづしにならなかつたのでせう。」

「多分さうでせうね、ウェストさん、或る人々は全く悲劇のためにのみこの世へ生れて來ます。この繪を見た人は、その人を知らなくても、何か悲劇的な最後を遂げたと思ふでせうよ。」

昭和五年七月十八日印刷
昭和五年七月二十一日發行

世界大衆文學全集第四十三卷
血と砂

版 權	譯 者	鈴 木 厚
所 有	發 行 者	山 本 美
	印 刷 者	竹 内 喜 太 郎

發 兌

東京市芝區愛宕下町
四丁目四十番地

改 造 社

振替口座東京八四〇二番
電話芝(43)自一一二一
至一一二四番

(日清印刷株式會社印刷)

世界大衆文學全集總內容

第一卷	鐵假面 <small>(佛國大デユマ)</small>	大佛次郎 <small>(既刊)</small>
第二卷	家なき兒 <small>(佛國マロー)</small>	菊池幽芳 <small>(既刊)</small>
第三卷	前線十萬 <small>(米國ヤン・ヘー)</small>	櫻井忠温 <small>(既刊)</small>
第四卷	アルセーヌ・ルパン <small>(佛國ルブラン)</small>	保篠龍緒 <small>(既刊)</small>
第五卷	<small>椿</small> マノン・レスコ <small>姫(佛國小デユマ)</small> オ <small>(佛國プレボオ)</small>	久米正雄 <small>(既刊)</small>
第六卷	三銃士 <small>(佛國大デユマ)</small>	三上於菟吉 <small>(既刊)</small>
第七卷	放蕩息子 <small>(英國ケイン)</small>	菊池寛 <small>(既刊)</small>
第八卷	<small>ダイヤモンド</small> カイトライト事件 <small>(英國フレツチャー)</small>	森下雨村 <small>(既刊)</small>
第九卷	オリヴァー・ツイスト <small>(英國デイツケンズ)</small>	馬場孤蝶 <small>(既刊)</small>
第十卷	トウエーン名作集 <small>(米國トウエーン)</small>	佐々木邦 <small>(既刊)</small>

第十一卷	秘密第一號他一篇 <small>(英國ホルラア)</small>	木村毅 <small>(既刊)</small>
第十二卷	巴里の秘密 <small>(佛國シユール)</small>	武林無想庵 <small>(既刊)</small>
第十三卷	アングル・トムス・ケビン <small>(米國ストー)</small>	和氣律次郎 <small>(既刊)</small>
第十四卷	英米新進作家集 <small>(歐米諸家)</small>	牧逸馬 <small>(既刊)</small>
第十五卷	メトロポリス他一篇 <small>(獨逸ハルボウ)</small>	秦豊吉 <small>(既刊)</small>
第十六卷	カチユウシヤ <small>(露國トルストイ)</small>	近松秋江 <small>(既刊)</small>
第十七卷	九十三年 <small>(佛國ユーゴー)</small>	早阪二郎 <small>(既刊)</small>
第十八卷	寶島他二篇 <small>(英ステイイヴンソン)</small>	野尻清彦 <small>(既刊)</small>
第十九卷	<small>スベードのキング</small> 四枚のクラフグ <small>(瑞西ゾーゼ)</small>	小酒井不木 <small>(既刊)</small>
第二十卷	<small>ラ・ボエ・ダラス</small> ラ・ボエ・ダラス <small>(米國プローチー)</small> <small>ム(佛國ミユルセ)</small>	森岩雄 <small>(既刊)</small>
第二十一卷	シャロック・ホームズ <small>(英國ドイル)</small>	延原謙 <small>(既刊)</small>

第二十二卷	ゼンダ城の虞 <small>(英國ホープ)</small>	寺田 翫 <small>(既刊)</small>
第二十三卷	紅 藥 襲 <small>(英國オルツイ)</small>	松 本 泰 <small>(既刊)</small>
第二十四卷	宇宙 海 底 旅 行 <small>(英國ウエルズ 英國ヴェルヌ)</small>	木 村 信 兒 <small>(既刊)</small>
第二十五卷	平 妖 傳 <small>(支那羅貫中)</small>	佐 藤 春 夫 <small>(既刊)</small>
第二十六卷	ルコック探偵劇 <small>(佛國ガポリオー)</small>	田 中 早 苗 <small>(既刊)</small>
第二十七卷	スカラムツシユ <small>(米國サバチニ)</small>	小 田 律 <small>(既刊)</small>
第二十八卷	洞窟の女王 <small>(英國ハガード)</small>	平 林 初 之 輔 <small>(既刊)</small>
第二十九卷	海の義賊他一篇 <small>(佛國ベルネエド)</small>	高 橋 邦 太 郎 <small>(既刊)</small>
第三十卷	ポオ。ホフマン集 <small>(米國ボオ 獨逸ホフマン)</small>	江 戸 川 亂 歩 <small>(既刊)</small>
第三十一卷	三等水兵マルチン <small>(英國マフレイル)</small>	福 永 恭 助 <small>(既刊)</small>
第三十二卷	幻島ロマンス <small>(米國ゲール)</small>	野 口 米 次 郎 <small>(既刊)</small>

第三十三卷	ロ モ ラ <small>(英國エリオット)</small>	賀 川 豊 彦 <small>(既刊)</small>
第三十四卷	世界滑稽名作集 <small>(歐米諸家)</small>	東 健 而 <small>(既刊)</small>
第三十五卷	世界怪談名作集 <small>(歐米諸家)</small>	岡 本 綺 堂 <small>(既刊)</small>
第三十六卷	世界怪奇探偵事實譚 <small>(歐米諸家)</small>	松 本 泰 <small>(既刊)</small>
第三十七卷	グランド・バビロン・ホテル <small>(英國ベネット)</small>	平 田 禿 木 <small>(既刊)</small>
第三十八卷	水 滸 傳 <small>(支那施耐庵)</small>	笹 川 臨 風 <small>(既刊)</small>
第三十九卷	永 遠 の 都 <small>(英國ケイン)</small>	戸 川 秋 骨 <small>(既刊)</small>
第四十卷	ロビンソン・クルーソー <small>(英國デフォー 佛國ウエルヌ)</small>	白 石 實 三
第四十一卷	テ ス <small>(英國ハーテイ)</small>	廣 津 和 郎 <small>(既刊)</small>
第四十二卷	二 都 物 語 <small>(英國テイッケンズ)</small>	名 原 廣 三 郎 <small>(既刊)</small>
第四十三卷	血 と 砂 <small>(西班牙イバニエス)</small>	鈴 木 厚 <small>(既刊)</small>

第四十四卷	カルメン。コロンバ <small>(佛國メリメエ)</small>	宇高伸一 <small>(既刊)</small>
第四十五卷	ボムベイ最後の日 <small>(英國リットン)</small>	小池寛次 <small>(既刊)</small>
第四十六卷	小公子。小公女 <small>(英國バアネット)</small>	佐佐木茂索 <small>(既刊)</small>
第四十七卷	あの山越えて <small>(米國カートン)</small>	尾崎士郎 <small>(既刊)</small>
第四十八卷	赤 <small>ビム</small> 襪 <small>リ</small> 衣 <small>コ</small> の <small>物</small> 博 <small>士</small> <small>(佛國ゴロオ)</small> <small>(英國キユウ)</small>	大木篤夫 <small>(既刊)</small>
第四十九卷	妖花アラウネ <small>(獨逸エーヴェルス)</small>	浅野玄府
第五十卷	ガリヴァーの旅 <small>(英國スウィフト)</small>	鈴木彦次郎 <small>(既刊)</small>
第五十一卷	十字軍の騎士 <small>(波蘭シエンキヰツチ)</small>	森田草平 <small>(既刊)</small>
第五十二卷	シーホーク <small>(米國サバチニ)</small>	小田律 <small>(既刊)</small>
第五十三卷	黒星 <small>(米國マツカレ)</small>	和氣律次郎 <small>(既刊)</small>
第五十四卷	ノートルダムの癡癡男 <small>(英國ユーゴ)</small>	松本泰 <small>(既刊)</small>

569
61

